

---

# S・G (センチメント・ゲート)

智騎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S・G  
センチメント・ゲート

### 【Nコード】

N4258W

### 【作者名】

智騎

### 【あらすじ】

あの日から、平和な高校生活が始まった時からソレは起きてた。いつの間にか俺の周りには居たんだ。かけがえの無い物が。そして変わっていたんだ俺は。俺が作った扉を自分で開いて

## 0 プロローグ(前書き)

初めまして、智騎といいます。

まだまだ不慣れで、下手な所もありますが色々な人読んでもらえる  
と嬉しいです。

よろしく願います

## 0 プロローグ

「なあ、知ってるか？」

「何？」

「人間って色々な本音を持ってるんだってさ」

「急に何？」

「いいから、とりあえず聞けよ」

「うん……。それで？」

「例えば……」

ある人は優越感

ある人は依存からの自立感

ある人は悲観に対する自虐

ある人は消滅に対する恐怖感

ある人は過保護という名の耽溺

ある人は無力感

ある人は孤独感

そしてある人は……」

「ある人は？……」

「ある人は永遠にあつた悔恨だ」

「……何で最後だけ溜めたの？」

「何でつて……最後だけは一番大切で、中にちゃんと保存しとかなきゃいけないからだ」

「……ふーん。結構意味深いね」

「まあな……」

「それより……」

「ん？」

「何か急に変な話し出したね」

「話出したって……。お前、今頃過ぎるだろ……」

「いいの。僕は君の話さえ聞ければいいから」

「何でそんなに俺の話が聞きたいんだ？」

「そんなに決まってるじゃん。君の話しが楽しいからだよ」

「……そっか」

「それじゃ僕は帰らなきゃ」

「ああ、そっか……。そんじゃあな」

「うん。じゃあね！」

けどさ、この話が本当だったらどうする？

今、俺が話した事が本当だったらお前はもっと楽しむのか？  
なら嬉しい。

けどなこれって本当なんだよ。

振り返ると俺って結構変わったよ。

「ちてと……。俺も帰るか」

## 0 プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします

## 1 始まった高校生活（前書き）

更新は結構不定期なので、そのの所ご了承下さい。

なのでこのようにどんどん投稿出来たらしたいと思います。

ちよいちよい書き方が安定しないかもしれませんが、そこもご了承下さい。。。。

それではごーぞー！



## 1 始まった高校生活

神埼高校。

普通の学力で普通な生徒としかいない普通な高校だ。

1年1組。

時は4月。一年からしてみれば初めての高校生活で期待と緊張で胸が膨らむはず。

校内には所々桜が満開していて花見には丁度いいほどの咲き時だ。

4月と言ったら入学式の次にクラス内の自己紹介。

普通は何かして第一印象を良くしようとしている生徒もいる。

教室内には少し春風が気持ちよく吹いていて眠気を誘う。

授業中に眠気に負けてしまい堂々と涎を垂らしながら寝てる個性が何も溢れていない目立つ白髪の男子生徒が一人いた。

彼の名前は葛城詩音。

日常を望む高校生だ。ちなみにこの物語の主人公。

容姿は目立つ地毛の白髪に黒い瞳。髪はバッサリ切っている。右腰にはよく分からないが茶色い小さなバッグが巻きつけてある。バッ

グの下の右足の太腿には茶色いホルスターが着いている。ホルスターには銃口を下にしてあるモデルガンが入っていた。

何故モデルガン？なんて質問はしないように。何故ならこの物語が全て崩れます。強いて言うなら趣味です。

趣味は睡眠、のんびりする事。

特技は総合格闘技。(昔、無理やり親に習わされた。今でも少し自己練習している。)ちなみにこの事は誰にも教えていない。

好きな物は平和な日常と銃。

普通の人から見れば少し、ではなく大分変かもしれないがそれが彼。

「……………」

「ん……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「葛城!!」

「ふえ？」

ようやく起きたかと思えば目が半開き。しかも意識も朦朧としている様子。

「起きろ！」

瞬間

教師の手から勢いよくチヨークが発射された。そのチヨークはいい具合に

コッーン！！

小気味の悪い音を出しながら彼の頭に直撃した。

(ちなみにこれはあくまでフィクションです)

「つつ！！」

直撃した彼はそのまま後ろに全体重をかけ、のびていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ハッ！」

チヨーク攻撃により完璧に目を覚ました彼は勢いよく体を起き上がらせた。

彼はチヨークが直撃して少し白くなっている所を摩りながら言った。

「・・・・・・・・チヨーク投げることはないじゃないですか」

けど言い方は起きているのか分からないくらい緩い言い方だった。まるで友人とでも接する様に。

「寝ているのが悪い！！」

正論を言われた彼は渋々返事をした。

「はい……」  
普通ならこの時期は反抗とかするが詩音は今時珍しく反抗のはの字もしなかった。

昼休み

授業が終わり昼食も食べ終わり相変わらず欠伸をしながら屋上に向かう階段の途中、人だかりが出来ていた。男女混ざってざわめいていた。

途中誰かの名前を呼ぶ声があった。

「栞様〜！」

「潤様〜！」

「……誰それ？」

「あなた！潤様の事を知らないの！？境潤様は成績優秀、運動神経抜群！しかも年上！誰もが彼氏にしたい先輩よ！！！」

「あー……えと」

「香村栞様を知らないのか！？潤先輩に並ぶ成績優秀、しかも薙刀を習っており性格も凛として美しい！」

「あー……はい」

だが詩音にとってはそんなのどうでもよ過ぎる事だった。彼は屋上に寝に来たのに、何でこんな事になってんだ？と軽く呆れていた。教室に行っても静かではないためここしかない。とりあえずどうするか考えた。

- 1、待つ
- 2、人混みを無視して中に入る
- 3、ここにいる全員を邪魔者とみなし片っ端から撲り気絶させていく

(・・・。。。。。。。。妥当に2だな)

詩音の思考がその選択肢に行くと彼は直ぐに動いた。

人混みをかきわけながら

「すみません。どいてください」  
前に進んだ。

そして

ドンッ

追い払われるように飛び出しながらやっと出れた。

そして彼は「・・・疲れた」と言いながら目の前を見た。

1 始まった高校生活（後書き）

## 2 異変（前書き）

前回までのあらすじ

平凡な男子高校生主人公、葛城詩音はどこにでも居そうで居ないダ  
ルそんな男子。

そんな彼は昼休みに昼寝をしたく直ぐに昼食を取り、五月蠅い教室  
から抜け出し静かな屋上に行こうとした。

だがそこには大勢の生徒の姿。それをかき分け進んだ先には・・・

本編どーぞ！

## 2 異変

人混みを抜けた先には海色の蒼い瞳に黒々しい髪をポニーテールにしている背の小さい女子の先輩と茶色の瞳に栗色の髪を少し後ろに結んでいる男子の先輩がいた。

多分予想では男子の先輩が境潤先輩で女子の先輩が香村栞先輩。何かを話していた様子だ。

「……………」

「……………」

急に入ってきた詩音に驚いた二人は不思議な顔をしながら詩音を見た。

言葉に詰まった詩音は

「えっと……………」

と言葉を選ぼうとしたが急に潤が

「すまないんだけど、場所を変えてもらえないかな？」

急に言葉をかけられ驚いた詩音だったが即答した。

「嫌です」

びわびわ……………。

後ろが激しくざわめいた。

「何だよアイツ」



「何様だ!?!」  
など色々聞こえたが彼は無視した。

「ここ、俺の場所なんで」

調子に乗ったのかよく分かりませんがノリに乗っている詩音に少し不愉快を持った潤が言った。

「たかが一年が調子に乗らないで欲しい」

「相手が先輩だろうが同級生だろうが関係ないんですよ。俺は邪魔だから邪魔って言ってるんです」

「ッ!!.....お前!!.....」

いきなり口調を強め詩音に返そうとした潤だが

グイッ.....。

その潤の制服の袖をある女子生徒が無言で引っ張った。

「.....」

「栞.....」

栞だった。

彼女は何も言わずにただひたすら訴える様に潤を見つめた。

すると

「分かった」

と栞の訴えに答えた。

「え？」

すると栞は急に潤の制服の袖から手を離し、詩音に近づいた。

「……………」

詩音は無言な栞にたじろぎながら聞いた。

「……………ですか？」

「名前……………学年……………教えて」

栞は単語をポツポツと小さく呟いた。

「一年……………一組……………葛城……………詩音」

それにつられ詩音も単語で話した。

「ありがとう……………」

栞は感情が籠って無さそうに素っ気無く、そうお礼を言つとまた潤に近づいた。

すると今度は潤が

「……………じゃあね、葛城君」

チラ見をしてそう言いながら帰って行った。

潤と栞が出て行くとそのファン達もダダダダッとマラソンのように走って行った。

「・・・・・・・・・・」

誰もいなくなつた屋上に一人寝ながら考えていた。

「何だ、あいつ等・・・」

さっきの潤と梨の事らしい。

「俺が言うのもなんだけど・・・、変なやつ等だったな・・・  
そう思い返していると

「おーい！」

「？」

詩音は声がした方に振り向くとそこにはクリーム色の髪に黄色い瞳  
をしている同年齢くらいの少年が詩音の方に向かって走ってきた。  
一方詩音は彼を見ると頭に？マークを浮かばせていた。

「誰？お前」

「冗談よせよ・・・。お前と俺、一緒のクラスだぜ？」

「クラスメートA？」

それは脇役に言う言葉だぞ。

「違う、違う」

と少年は軽く手を顔の目の前で横に振るとその手を詩音の差し出しながら言った。

「俺は空。永井空。ヨロシクな」

そう言われた詩音は

「別に目立つ様なお前なんかヨロシクされる気はないね」

言い草的に空の何かを知っているらしい。

「俺、知ってるのか？」

「ああ。最近妙にお友達を増やそうとクラスの全員、片っ端から声をかけている奴だろ」

詩音は嘲笑うと出口に向かった。すると

「まあ合ってなくもないな。なあ」

空が詩音の後ろ姿に声をかけた。

それに

「……………」

詩音は無言で振り返る。

「お前は俺の**家来**にならないのか？」

「だからならないって言ってんだろ」

「……………そっか」

空は俯いたままそう呟いた。

詩音は「また変な奴に会った」と思うとさっさと帰って行った。

詩音が居なくなると空は一人

「・・・・・・・・・・アイツは死刑だ」

と声色を低くして一人呟くと直ぐさま

「あれ？俺何してんだ？・・・・ってヤベ！教室、教室・・・・」  
今のが嘘みたいに焦り出し、空も教室に帰って行った。

放課後

詩音が帰ろうと席を立ち廊下に出ようとした瞬間軽く空を見た。  
たまたま瞬きをした瞬間だった。

「・・・・・・・・・・え？」

空の背中に何かがあった。

見た目は空。だが何かが違う。言葉には言えないが、でも何かが違う。  
った。

もう一度瞬きをしたら・・・・・・・・

「　　いない・・・・・・・・」

そこには空しかいなかった。

## 2 異変（後書き）

物語が早くも動きました！

空の後ろにいた『何か』とは何か？

あと、感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願いします

### 3 深夜に開いたゲート（前書き）

前回までのあらすじ

主人公、葛城詩音は屋上への人混みをかき分け、その先にいた先輩の境潤と香村栞と少し話した。彼らは不思議な雰囲気だった。特に栞は無言であり喋らないが、そういう事を潤は必ず聞いた。一体何なんだろうかあの二人は？

そして屋上で一人寝ていると同じクラスの永井空と会った。彼は友達になれと詩音を誘うが、詩音はそれを断る。

詩音がいらない場所で彼は一人「死刑だ」と呟いていた。

そして放課後、詩音がたまたま帰る途中話している空を瞬きを一度してから見ると空の背中には『何か』がいた。

それでは本編どうぞ

### 3 深夜に開いたゲート

夜中11時50分

とある高校の正門前に一人、右腰にバッグを着け太腿にモデルガンを着け目立つ白髪の青年がいた。

「やつべえ……。どうやって入るかな？」

彼、葛城詩音は門前でこうして着いてから5分程悩んでいる。

「（……。よじ上るか）」

彼は思い立ったら直ぐに行動した。

ガシャガシャ……。タツ！

「さつさと行ってさつさと帰らなくちゃな」

詩音は堂々と中に入って行った。

良いこは真似しないでね

「はあーあ……。何で忘れ物なんかするのかな？」

一人自問をしながらどんどん進んでいく主人公。

「生まれ変わったら忘れ物をしない人間になりたい」

それは自分で努力すればなれます。

ガラッ！タツタツタツ！

「教科書とか忘れたなら別にいいけど筆箱だもんな……。」

「よりもよって何で筆箱なんだよ……。」などと一人ブツブツ文句



を垂れながら自分の席に行き、筆箱を取り早足で下駄箱に向かった。

途中詩音はある人影を見た。

「あれってクラスメイトA？  
じゃなくて永井空ね。」

「……………」

空は詩音の方を見向きもせず無言のまま奥へ行ってしまった。

「……………何かアイツってあんなだったけ？  
違うと思う。」

「何っーか……………死んでなかった？  
勝手に殺さないで下さい。」

「……………まあ、俺には関係ないしな  
ちゃんと主人公しろよ！！」と言う作者の意見も無視しそのまま下駄箱に向かった。

そしてスニーカーに履き替え、外へ出ようとドアに力を入れた。

瞬間

キーンコーンカーンコーン

ビクッ!!

何故か鐘が鳴った。

「んだよ、鐘かよ……。ったくビビらせんなよ……。って  
鐘？普通こんな時間に鐘なんか鳴らないよな？てかこんな時間って  
。。。」

携帯を開き暗い中余計に明るく見えた携帯の画面のいつも時間が書  
いてある所を見てみると  
十二時だった。

「。。。。。」

瞬間

ピクッ

校内の空気がガラリと変わった。嫌な予感しかしない。

「。。。。。。もしかして、何かのフラグ立つちゃった？」

詩音はその空気の変わりように焦った。

そして冷や汗を大量に流しながら必死に考えた。

「。。。。。。。」

動揺を隠し切れない中、一つだけ案が思い浮かんだ。

「こ、ここから出るか」

そう言つと急いでドアを開けようと力を入れるが  
グッ!

「。。。。。。。」

グッ！グッ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

グッグッグッ！！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一向に開かなかった。

（何で開かないんだよ）

一人扉の前で土下座をする少年。フツ意外にウケるかも。

「他にも道があるはずだ」

こういう時だけ頭が回る主人公です。

詩音はとりあえず来た道をもう一度行った。

途中誰かに助けを求めようと、電話をしようとするがやっぱり圏外だった。

そして自分の教室に着いたがそこには

そこには、この世の物とは思えない扉。

縁は黒いが中はもっと黒く、闇がそのまま入っているようだ。

見えているだけでも今まで経験した事がない光景に言葉が出ず、喉元

で詰まる。

「何だよコレ」

その一言でしか表せないものだった。

### 3 深夜に開いたゲート（後書き）

深夜12時。主人公の前に現れた黒いクラスの扉。

一体何処へ繋がっているのだろうか？

そして空は一体何処へ行ったのだろうか？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願いします。

#### 4 ゲートの中は感情の入り混じり（前書き）

前回までのあらすじ

深夜11時50分。

主人公、葛城詩音は忘れ物を取るため学校に来ていた。

さっさと教室に忍び込み忘れ物を取り、下駄箱に向かう途中だった。その途中、何故か意識が朦朧としている様子の空がいた。空は詩音を見向きもせずに入っていた。

空に対し、詩音もとりあず無視をし外に出ようとドアを開けようとした瞬間だった。

何故か突然12時になった瞬間鐘が鳴り出した。

それに動揺を隠せない詩音は早く学校から抜けだそうとドアを開けようとするが、一向に開く気配は無かった。

仕方なく学校の校内にまた入り、自分のクラスの教室へ行ったみた。だがそこには現実では目にしたことが無いような不気味な扉があった。

それでは本編どうぞ

#### 4 ゲートの中は感情の入り混じり

「何だよコレ」

詩音はこの世の物とは思えない扉を見てしまった。一度見ると何秒間かその扉を見るのに釘付けになった。

扉を見ながら考えた。

（最初には無かったよな？てか俺、ここ入ったような？これがあつたのは鐘がなって雰囲気が変わってから。やっぱり全てが変わったのは十二時になってから。でも、一体何がどうしてこんなのが作られたんだ？）

（深く関わらない方が身のためだよな？）

「.....」

「そつだよね？うし、止めとこ」  
平和主義にも限度があるよ主人公。

「さつてと、出口見つけて帰るか」

と後ろを向いた瞬間詩音の頭にふと空の事が過った。

（そついや、どうしたんだろアイツ？）

瞬間

(シ……オ……ン)

ッ!!

詩音は扉の方へ勢いよく振り向いた。

(今、扉から声が出た？しかも俺の名前?)

「……………」

(タツ……タツ……タツタツ……タツ)

一度唾を飲み込んだ詩音は扉の目の前に立った。  
深呼吸をして、手の中に入れようとした。

ズブズブツ

「ッ?!」

手は扉に呑み込まれるように入り、腕まで入った。

「!!!!」

急いで抵抗するが

「止めッ!!」

そのままどんどん体が扉の中に呑み込まれていく。

ズブズブズブツ

「のわっ!!!!」



遂に体ごと意識も中に入った。

荒永空のゲート

「……何だよココ？学校？」

『……逆らう奴なんて消えればいいんだ』

「へ？」

『俺が誰よりも上なんだ』

「何だよ、お前？」

『お前は俺。お前の本音』

「本音？それが……俺の？」

『ああ』

「ざけんな！俺は、俺はそんな事思っていない！」

『嘘だ』

「ッ！！」

『ウザいんだよな？世界は俺中心に動いてる。俺に逆らうもんは皆消えればいいんだよ。俺が誰よりも上なんだよ』

「違う……」

『家族も。俺が言うこと聞いてやってんのにべらべら俺を否定しやがって、苛つくしウザイ』

「違うッ……」

『友達もだ。俺がなってやったのにどいつもこいつも自分の事しか考えてない。たまに俺の陰口さえも言ってる。何様なんだよアイツら？俺の言うことが聞けないのかよ？』

「違う……」

『何よりもアイツが一番ムカつく。かつらぎしおん。アイツは俺の事を否定しやがった……。だから処刑だ』

「違う！……」

『何で拒否するんだよ？俺は特別なんだよ。何してもいいんだ。これが永井空なんだよ！』

「俺はッ」

『俺は……。臆病だよな』

「……。臆病？」

『アイツが死んだ事実を受け止められないからって、自分を棚に上げて』

「俺は違う……。そんなの」

『守れることのない約束を言い訳に逃げて』

「逃げてなんかッ！……。いない」

『本当にそうか？』

「ッ！！」

『だって自分で知ってるだろ？アイツの一番傍にいたのは自分だっ

て。だから尚更逃げた。自分が殺してはないという事を肯定するためにさ』

「ちっ違うー！あ、あの時は……」

『ほら、また事実に向き合えない。ひたすらに言い訳を考え、探している。そうしないと怖くなる』

「違う……違う違う違う違う違う……」

『怖いんだよ。毎日毎日、認めてしまつのが怖いんだよ……』

「勝手に俺を語るなあ……！」

『……』

「……」

『……』

「へ？」

『そんなにここで感情を溢れ返したら消えるぞ。お前と言つ存在が』

「……き……消える？」

『だからその余った体は俺が貰つ』

「・・・余った・・・体？」

『じゃあな』

「うっわあああああああああ！！」

「何だ・・・コレ？」

詩音の目の前に写ったのは廊下だった。後ろを勢い良く振り向くと自分のクラスの教室だった。

(学校・・・だよな？)

けど学校とは明らかに違う雰囲気。ありとあらゆる何かが絵の具のように混ざり合い、この嫌な空気を出している。背景も違う。色がついていない。全てが黒い。

(ここは俺には全く向いていないとこみたいだな)

ふと思った。

(絶対ここで気持ちが揺らいたら、この空間に全て飲み込まれる)  
詩音は自分で意見を持つと、緊張の糸を張り巡らせながら慎重に進んだ。

一年の教室がある廊下を降り、下駄箱に向かう途中、人の気配がした。

(誰か、いや何かがいる?)

暗くて見難い何がかがいる気配がする。

「あつ」

(ここクラスメイトAがいた所だ)

続いてもう一つ気づいた。

(じゃあここにアイツもいるかもしれない? てかこの気配がアイツ  
かもしれない?)

もう一度確かめようと曲がり角から恐る恐る見た。が何故か居なかつた。

(いない?)

そして首を前に戻した。そこには

「.....」

『・・・・・・・・・・、』

「・・・・・・・・どーも」

永井空がいた。だが彼の目には生気が無く、体だけがあり魂が抜けているようだった。  
しかも

「!?!」

詩音には見覚えがあった。あの時、瞬きをした時に見た空だった。

『かつらぎ、しおんはウザイ。だから』

「!?!」

『クロス!?!』

ガタツ!

「ぐあつ!?!」

その怒声と共に首を押さえつけられた。勿論首がみるみる内に絞ま  
つていく。

「あつ・・・・・・・・くつ・・・・・・・・あ」

『アハハハ!苦しめよ!苦しめよ!苦しめよ!』

「や・・・・・・・・やめ・・・・・・・・やめる!?!」

ドスッ！

『ッ！』

空の腹を蹴りつけ、空を離れた。

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」



#### 4 ゲートの中は感情の入り混じり（後書き）

一体空はどうなってしまったのか？

そして不気味な扉の正体は？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。

これからもよろしく願います。

## 5 感情の暴走（前書き）

前回までのあらすじ

深夜12時に開いた謎のゲート。

主人公、葛城詩音はゲートが気になったがあまり関わりたくはないため見るだけで帰ろうとしたがその時、彼は空の行方が急に気になった。

そして詩音が空の事を思った瞬間、不気味な声が詩音の名を呼んだ。一体何だ？と不思議に思った彼はゲートに近づき手を中に入れようとした。

瞬間、そのまま勢い良くゲートに飲み込まれ入って行った。

詩音が気を失っている間、先に中に入っていた空は自分自身（の本音）と本音と嘘のぶつけ合いをしていた。

空は話している間、自分を知っているような口で話していて、自分の事情を全て知っている相手（自分自身）が気に食わなかった。

そして、遂に空が自分自身（の本音）を否定した。すると、空の意識は闇の中に墜ちた。

意識を取り戻した詩音は周りを観察した。

中は学校だったが、雰囲気も違く、背景が全て黒かった。

彼は緊張しながら奥へと進んだ。

そして現実で空を見た場所で空、ではなく空の体に乗っ取った何かと出くわした。

空は詩音を見るな否や、急に詩音に襲い掛かってきた。

それでは本編をどうぞ

## 5 感情の暴走

空の異変に気づいた詩音は聞いた。

「どつしたんだよ?」

『どつした?俺はお前を処刑しにきたんだよ』

詩音は処刑という言葉に首を傾げた。

「処刑?」

『俺に逆らったからな』

「逆らう?」

『ああ。だからお前の存在を消すんだよ』

詩音は益々訳が分からなくなっていた。話しが分からないままどんどん進んでいく。自分が何かをしたから多分空はその答えにたどり着いたと思うが、自分が一体何をしたのか分からなかった。

「処刑って何だよ!俺が何したんだよ?!」

『俺の命令を聞かないのが悪い。黙って兵士は王の言う事だけ聞けばいいんだよ!』

「.....」

主人公は何を思つか急に黙りだした。

そして必死に考えた。何故俺が処刑されるのはとりあえずほっておき、空に一体何が起きているのか？彼が言ってる事は一体何なのか？

『アハハハ！自分で自分を後悔するんだな屑が！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は空が言ってる事を聞き流し、これが本当に彼が思っている事なのだろうか？

これがもしかしたら彼の本音なのだろうか？

彼の行方は分からないが自分の目の前にいる空が何かをしたに違いない。

けどその何かというのは少し分かった気がした。

目の前の空（本音）が無理やり空の感情を爆発させたかもしれない。自分がさっき気づいたとおりにここで感情をむやみに暴走させたら自分が飲み込まれる。

だから空も飲み込まれたんだ、多分。

なら、これが空の本音ならどうにかして止めるしかない。

方法は一つ、空の感情を読み取りそこを衝いていけばいい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、そっか」

『ああ？』

空は急に黙りだしたり急に喋りだす詩音を変に思った。一体コイツ、何を考えているのか？と。

そんな空の疑問も無視し、詩音はどんどん衝いていく。

「いつ、誰がお前の兵士になった？俺はあの時断った」

『はあ？』

「お前の妄想に俺を巻き込むなよ」

『妄想・・・だと？』

その言葉を空は聞き逃さなかった。

「自分で自分をいつまで棚に上げるつもりだよ？」

『ハッ！俺が満足するまでに決まってるんだろ』

「んで、お前はいつ満足すんだよ？」

『永遠だよ。満たされない心がある限り』

一つの事を確信した詩音ははっきりとした声で言った。

「優越感」

『！！』

「お前の感情、優越感だろ？」

『優越感？俺が、んなガキみたいな事するかよ？』

「俺が一番上。俺に逆らう奴は消える。俺の価値は永遠だ。俺が王だ。俺が特別だ」

『それがどうした？』

「そついうのを優越感つつてんだ」

『・・・・・・・・』

「？」

今度は空が黙り、急に詩音に向かって怒声を吐くように言った。

『お前、処刑じゃ済まないな。死刑執行だ！』

「ッ！！」

そうとだけ空は言つと、どこから出したのか分からないがバットを出した。

(殴られる！？)

だが詩音の考えとは裏腹に詩音を殴るところか言葉を唱えただけだった。

『アヴィリテイ・ヴァン』

そう唱えた途端空が持っているバットは闇に包まれ鎌になった。

「ちよっマジかよ?!」

空はジリジリと詩音に詰め寄り、逃げる詩音に遂に

タッ！！

走り出した。

(早ッ！てかこんなの無理に決まってるだろ！？俺は撲れるが武器なんて出せない！！)

そう心に中で愚痴っている間にも空は近づいてきている。

「くっ！！」

遂に空が詩音の目の前に来て、鎌を振るってきた。どうすればいいか分からない詩音は闇雲に避けた。

(くそっ！どうすればいいんだよ！)

動揺を隠し切れない詩音は

「え？・・・」

集中が途端に切れ、転んだ。空に隙を見せたのだ。瞬間空は大きく振るう構えをし、鎌を上へ詩音に覆いかぶさるようにした。

(ッ！！)

焦りに焦った詩音は急いで何か無いと周りを見渡した。

「！！」

そして見つけた。

自分がいつも持ち歩いているモデルガンを。

詩音は急いでモデルガンを抜くと訳も分からず、本当になるかも分からないが空が持っている鎌の手元を狙った。  
そして

「アヴィリティ・ヴァン」



## 5 感情の暴走（後書き）

詩音の覚醒はなるのか？！

詩音の運命は！！

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願いします

## 6 覚醒（前書き）

100PVありがとうございます！！

こんな作品を100以上の人に見てもらって作者はとても嬉しいです^^

なので見ている人のためにも出来るだけ更新頻度を早くします！！

結構更新遅れてすみませんでした・・・。

空が何故襲ってくるのか。

何故こんなにも自分を憎んでいるのか。

これは多分、この空間内の現象。

そして今俺にぶつかってきているのは空自信の本音。

だから俺は対抗してやるよ。お前がそう思うなら俺が止めてやる。

そう思う一心にひたすら詩音は空と闘っていたが、空が呪文のようなものを唱え、武器を出した途端詩音には止める方法が無くなった。あとは勘と体の経験でひたすらに避けるしか無かった。

だが、気を抜いた瞬間転び、空に隙を見せてしまった。

絶体絶命の中詩音が出した物。

それはいつも持っているモデルガンだった。

可能なのかも、使えるかも分からない。

だけど詩音はこれに懸けるしか無かった。

思いよりも体が動いていたんだ。

そして唱えながら引き金を引いた。

それでは本編をどうぞ

## 6 覚醒

詩音は静かに唱えた。

「アヴィリテイ・ヴァン」

唱えた途端

『・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・え？」

何も起こらなかった。

「・・・・・・・・・・」

廊下中に無音が蔓延した。

だが

タツー！！

その音は空の足音により掻き消された。

「っー！！」

近距離過ぎて避けるにも避けられなかった詩音は

バツ！！カンツ！！！！

持つてるモデルガンを急いで空に向けて投げた。  
空の鎌にモデルガンが当たる。

だが勿論何も意味はない。  
意味もないが詩音は瞬間、急いで足を動かした。

モデルガンも無くなり、丸腰な中残った体だけを動かし空の連激を  
必死に避ける。

だが詩音にもうチャンスはない。  
また気を抜いたら次は殺られる。  
そうならないためにも頭をフル活動させる。

次の手は？

武器は？

体の動きは？

当たったら死ぬぞ！

隙を見せるな！！

けど、何か・・・何か無いのか？

・・・もしかしたらあの呪文じゃダメなのか？  
なら他の何か？・・・。

もしかしたら俺の昔にあった何かかもしれない。

俺だけの何かかもしれない。

思い出せ。

思い出せ！

頭の隅の隅まで使え！  
答えは記憶にある！  
だから！…………。

思い出せ！！！！

！！！！！！

そうだ。

昔、好きな言葉があった。

アレかもしれない。

けど間違ってたらどうする？

またならなかったら？

くっ！！今はそんな事考えてる暇はない！！

いいから！体を動かせっつ！！！！

「……………」

けどどうすればいい？

こうしてる間にも体力は落ちていく。

こうしてる間にもモデルガンから離れていく。

なら！！

瞬間

空が鎌を横に振った。

それをしゃがんで避ける詩音。

近距離から……

そして空の足を取り

『!!!』

攻撃を仕掛ければいい!!

バランスが崩れた隙だらけの空の手元に

「はぁ!!!」

膝蹴りを横に入れた。

『つく!!!』

そのまま吹っ飛んでく鎌。

だが詩音はその鎌など気にせず、全力で走りモデルガンを取りに行った。

そしてモデルガンを取り、振り返り、空に構えようとした。だが

「……早っ」

空は詩音の目の前で鎌を構えていた。

だが詩音はそれに臆する事なく唱えながら引き金を引いた。

「リミッターブレイク」

瞬間

パンツッ！！カランカラン・・・

『！！！！』

「おほお、超痛え・・・」

パンツッ！という乾いた音で空の手から鎌が弾かれ、カランカランという音で鎌が落ちた。

撃った本人は拳銃を使った経験がないため初めて感じた事がない衝撃を感じた。奇妙な悲鳴をあげながら手を擦っている。

それを見た空は驚いた。

何で呪文が分かったのか、を。

どうしても気になる空は恐る恐る詩音に聞いた。

『何で分かった？』

詩音は「痛え・・・」と呟きながら手を準備運動するようにブラブラさせながら

「俺の昔の好きな言葉。思い出してね」

『・・・何だ、たかがそんな事か。興味もない。じゃあ終わらせるぞ』



空は待っていたかのように鎌を取りに行く

ダッ!!

そこから大きく踏み込み、跳び

「っ!?!」

そのまま大きく鎌を振り下ろした。

「くっ!!」

急いで避ける詩音。

空は着地すると振り回すように鎌を振ってきた。

「待てって!!」

カンッ!!!!

金属がぶつかりあった音が響いた。

詩音が瞬時に拳銃を盾にし、耐えた。

『ッ!! 俺はお前を殺す!!!!』

「だから・・・落ち着け・・・って」

空の怒声と共に鎌に力が入る。

「くう・・・」

そろそろ詩音も限界そうな顔色を見せた。

そして遂に空が動き出した。

空は一回鎌を離した。

「っえ」

すると前に体重をかけていた詩音はそのまま前のめりに倒れた。

瞬間

ドスッ！！

「うつ・・・」

鎌の刃がない柄の部分で腹を殴った。詩音から小さな悲鳴が聞こえる。

「ッ！！」

そのまま続けて回転し刃の方を詩音に構えた。

『・・・死ね』

## 6 覚醒（後書き）

覚醒したと思われたが、逆に隙を見せてしまう詩音。

またもやその隙も空に拾われた。

本当に勝てるのか？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願ひします

## 7 詩音の意見（前書き）

前回のあらすじ

遂に覚醒した詩音だったが、それはどうやら違う呪文だったらしく他に方法がなく、一時的にモデルガンを投げ一旦そこから離れた。そして空の攻撃をまた避け続けた。

その間に頭を使い、記憶を探り、そして見つけた。

自分だけの呪文を

それに気付いた詩音は空に対抗し、空が隙を見せている間にモデルガンを取り、空に構え唱えた。

瞬間、覚醒しモデルガンが本物の銃となり空の鎌を弾いた。

だが空の鎌には対抗出来ず、空の怒声と共に隙を突かれてしまう。

またもや絶体絶命の詩音！

どうするのか……。

それでは本編をどうぞ

## 7 詩音の意見

「はは……」

詩音の口からは状況が分かってるはずなのに乾いた笑いが出た。笑いを止めるとほくそ笑む。  
すると

ボタボタ……。

『なに……やってんだよ?』

空は詩音の行動に疑問を口から漏らしながら詩音を驚きの目で見た。詩音が空の鎌の刃を掴んでいた。掴んでいる詩音の手から赤黒い血が垂れ、真下には血溜まりが出来ていた。見ているだけでもかなり痛々しい。

詩音は鎌を掴みながらも弱々しい声ではなくはっきりとした声で言った。

「俺はさ、確かに銃なんて使った事がない。けどここまで至近距離だと流石に当たりそうじゃね?」

『ッ!』

空が力を入れても鎌はピクリとも動かない。

『ハッ！でもこの体はアイツのだぞ』

だが詩音は空の脅しにもかからず

「誰が撃つかよ。ソイツの体なんか」

『へ？』

空の拍子抜けな感嘆さえも聞かずに狙いを空の胸に定め

躊躇無く引き金に

少しずつ力を入れ

そして

ドンッ！！

耳が痛くなる程の銃声が響いた。

瞬間、空の体に衝撃が襲い、箇所から赤黒い液体が周りに飛び散った。

それと同時に空の体が後ろのめりになり、その勢いで倒れた。

詩音の前には空の死体があった。詩音は無言のまま立ち去るうとし

たが

「起きろ」

また空の近くに行き、声をかけた。とうか、え？生きてるの？  
撃たれた（？）当の本人はヒョイツと体を軽々しく起こした。

『あれ？生きてる？』

「そりゃそうだ。だって俺が撃つたのは空気砲だから」

『じゃあ今の描写って……？』

「真つ赤な嘘。おい作者、血なんて一滴も飛び散ってないからな」  
いや〜やってみたくて。

「やるな。しかも俺が撃つたら物語終わるだろ」

じゃあ主人公交代で。

「ふざけんな」

作者と主人公がふざけてたら途端に空が呟いた。

『………何なんだよお前』

「は？」

『何で殺さないんだよ！』

「いや、俺、平和主義者だし」

『そんなん、ただの言い訳だ！同情なんかしてんじゃねえ！！』

「……同情なんか誰がした」

『したさ、今！俺とお前は対等なんかじゃねえんだよ！！』

「……じゃあさ」

『？』

「他の人間はどうでもいいのかよ？」

『ああ、いいさ！』

淡々と呟いた。少ししか声を出していないがはっきりと言った。

「ガキ、自己中」

『んだと！』

「俺はそのままの事言っただけ。優等つーのはな自分が偉い」自分の事しか考えられないってことだ」

『ッ！！言いたい事だけ言いやがって！！！！』

「ああ、言うさ。何を話そうが俺の勝手だしな。それと自分が偉いつてのは俺はどうも気に入らない」



『は？』

「お前さ、知らねえの？世の中にはすげえ頑張つて、必死に苦勞して、人の上に立とうしてる奴がなんだよ。まあ、そりゃあ自分が偉くなりたいからとかじゃなく、他人に何かがしたいからだ。政治家しかり、国会議員しかり、内閣総理大臣しかり、自分のためじゃない。国や国民のためにやってる事だ。そういう人達は俺たちみたいに普通の人には出来ない事を成し遂げたから特別だつってんだ。テレビとかタレントとかもそうだろ？視聴者を元気にしたいとか、感動させたいとかそういう気持ちがあり、しかもそれを実現させようとしてる。そういうのも特別だ」

『……何が言いたい？』

「そついう人間たちをお前はすげえ馬鹿にしてるんだよ」

## 7 詩音の意見（後書き）

まさに詩音の賢者タイム来た！！

その意見に空はどう答えるのか？

そして本当の空は？

次は空のターンです。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。

これからもよろしくお願ひします

## 8 空の決意（前書き）

前回までのあらすじ

空と詩音の闘い。

ようやく流れが変わってくる。

覚醒を果たした詩音だったが、最後に詩音は武器ではなく自分の言葉に懸けた。

空に自分が空の本音に対してどう思っているか、そんな事言ってる味分かるわけ無い中言った。

「お前は人の上に頑張ってる立とうとしている人をすげえ馬鹿にしてるんだよ」

それが詩音の意見だった。

そんな中空は一体？・・・。

それでは本編どうぞ

## 8 空の決意

俺……。

一体？

……。

『勝手に俺を語るなあ！！』

……。

ああ、思い出してきた気がする。

はは……。自分を認めないってこんなキツイのかよ？まるで駄々こねてる子供みたいだな。

俺が変わったのはいつからだっけ？

……そうだ、アイツが死んでからだ。

アイツが死んでから、人に対する目が俺の中で変わったんだ。

復習とか恨みとか、そんな負じゃない。寧ろ、俺にそんなのは背負えない。

逃げたのが今の現実だ。

俺は本気で、本気で約束を守りたかった。あの気持ちは嘘じゃない。

本当だ！

だから俺は一層気持ちを高めた。

俺は……。

どうすれば約束を守れるんだよ？

どうすれば自分を変ええられるんだよ？

どうすればいいんだよ？

どうすれば・・・いいんだよ！

俺はただそうしていたかっただけなのに！！

事実から逃げるとか、気持ちが変わるとか、もう俺なのに俺じゃないみたいだ。

なら、体を自分に取りられて死んだ方がマシだ。

もうそれでいいんだ。

それで・・・いいんだ。

ここに・・・、この暗くどこまでも深い闇の中にいればいいんだ。

それで・・・。

『悩んで悩んで悩んで、どうしても分からなかったら目を閉じるの』

どうしても分からないとき、目を閉じる。

『それで胸に手を当てる』

胸に手を当てる。

『心に問いかければいいんだよ。私はどうすればいいですかー？つて』

心に、自分がどうすればいいか問いかける。

『そしたらきつと答えてくれるよ。だって心は嘘はつかないもん！』

・・・。

分かるわけないよな。

結局答えるのは自分。

無理に決まってる。

無理に・・・決まってる。

俺は本当に弱い。アイツは守れないし、自分からも逃げる。

何なんだよ・・・。

何なんだよ俺！！

「何で？」

え？

「空は約束守ってくれたよ。私を弱さから守ってくれた、強くしてくれた。最後まで私を見守っていてくれた。私の約束はそんな難しい事じゃないの。私は空が毎日来てくれたから楽しかったよ。毎日が輝いてた。だから空は悪くない。空は私を・・・」

怜！！

「幸せにしてくれたよ」

・・・・・・怜

「・・・お前が死んでも、その声だけは俺に届けたかったんだよな。アイツはこんなにも俺を理解ってくれていた。受け止めてくれた。なのに」

「なのに、何で俺は素直に受け止めてやれなかったんだよ」

約束にすぎり付くんじゃない。

事実から逃げるんじゃない。

そんな事じゃダメなんだ。  
それじゃ違うんだ。

俺がまず俺自身と向き合わなくちゃいけないんだ。

自分が変わらなくちゃいけないんだ。

必死に生きてきたアイツにこんな俺じゃ顔向け出来ないもんな。

「怜、絶対お前を笑顔にさせられるように、一生幸せと思えるように、そんな気持ちにさせる男になってやる。今度はお前からじゃない。……俺からの、約束だ!!!」

ああ、認めてやる。俺が臆病で弱い奴だって事を。だからそれを変えてやる。

自分を変えてやる。

## 8 空の決意（後書き）

一つ、気持ちを变えた空。

彼はまた新しい一歩を踏み出せるようになった。

そして、次回空が戻ってくる。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしく願います



## 9 空の決意表明（前書き）

前回までのあらすじ

空は一人思った。

自分は約束を守りたかっただけ。

だけどそれじゃダメだった。

どうしてこんな事になったのか。  
分からない。

なら答えを探せばいい。

だけど答えなんか分からない。

なら問えばいい自分の心に。

それも分からない。

なら自分が変わればいい。

今までの自分を変えてやる。

こうして空は新たな決意をした。

そして詩音と空の闘いも決着がついた。

それでは本編どうぞ

## 9 空の決意表明

『馬鹿に………してる?』

「ああ。ふざけるなっつー事」

『俺のどこがふざけてるんだよ!』

「てめえのその感情がふざけてるんだよ馬鹿」

『てめえに何が分かるんだよ!』

ザンツ!

空は勢いよく上に鎌を振り上げてきたが

「ツ!」

反射神経でそれを避け

「ふツ!」

浅く呼吸をして拳を引いて

『ぐがッ?!』

空の腹に右ストレートが綺麗に入った。

『ゲホ！・・・ゲホ！』

もろにストレートをくらった空は腹を抑えながら咳き込んだ。

「さっきのお返しだ。これでチャラ。だからいい加減止めようぜ・・・」

『俺は・・・出る気なんてない。今まで抑えられてきてようやく出して貰ったんだよ。俺は・・・俺は、ここで落ちる気にはなんねえんだよ！！』

空はまた鎌を持ち詩音に襲い掛かった。

瞬間

バツ！！

「『！！』」

空と詩音に間に誰かが入った。入った彼は詩音を護るようにした。

『今頃何の用だよ臆病者があ！！』

空は叫んだが

「・・・・・・・・」

そこには本物の空がいた。

彼は無言のままだった。

「……永井？」

詩音が恐る恐る彼の名前を呼ぶと

「ごめんな」

彼はちゃんと詩音の方を見て答えた。  
するともう一回自分と向き合った。

「どんな理由でもこれは俺の私情だ。コイツは関係ないだろ」

さっきとは違い、落ち着いたように話した。  
どうやら思いの整理が出来たらしい。

『俺はお前の本能に動いてるだけだ。殺したいと思ってるのはお前自身だろ！それとも何だ？それさえも認めたくないのかよ？』

「いや……認める」

『?!ッ』

「アイツから逃げた事も」

『……』

「俺が優越感の固まりだった事も」

『……』

「俺が臆病だった事も」

『・・・・・・・・・・』

「俺が！・・・アイツを護れなかった事も」

「俺が臆病だって事も」

『・・・・・・・・・・』

「全部お前のお陰でよく分かった」

『・・・・・・・・全部信じていいのか？』

「ああ。お前が俺だって事も認める。その証明に墓参り行って来る」

『・・・・・・・・分かった』

こうしてもう一人の空は消えた。

いや、正確に言うと空の中に入った。

## 9 空の決意表明（後書き）

こうして空は完璧に今までと変わった。

そして空は詩音にある事を言った。（次回）

ちなみに彼とは本物の空、という事です。

ごっちゃになったらすみません・・・。

もう一回その事はちゃんと決めなおします。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしく願います

## 10 空のけじめ 詩音の優しさ(前書き)

前回までのあらすじ

ようやく空が空間内に戻ってきた。  
そして空は自分自身に伝えた。

「全部、分かった。俺自身が弱い事。俺がアイツを殺した事」  
と。

空の本音はそれを聞くと、信じたようで空の中に消えて行った。  
そして空は詩音にある事が言いたかった。

それでは本編どうぞ

10 空のけじめ 詩音の優しき

空は急に詩音の方へ振り向くと

「いめん」

そう言いながら深々と頭を下げた。

こんな一言しか言えないが、とにかくこの一言が言いたくて仕方なかった。だがその答えに

「……………何が？」

詩音は怒りもせずになんと言った。

「へ？」

キョトンとした顔をしながら顔を上げると詩音は続けてこう言った。

「別に気にするような事じゃないし、首突っ込んだのは俺だし、お前の事も色々分かったし」

「……………ああ」

「んじゃ、行くぞ」

だが空は一向に動かない。

「……………」



「・・・何？」

「俺、あんなに巻き込んでそんな堂々と帰れない・・・」

「だから・・・」

「お前が良いって言うても俺が納得しない」

どうしても空は納得しなかった。そんな『ごめんなさい』という言葉で迷惑かけたことで全部がチャラになったわけはない。逆にそれで済みたいという気持ちがないわけではない。そんな気持ちがあるからこそ、納得出来なかった。だから空なりの踏ん切りがつけなかった。

どうしても納得しないという空に渋々詩音は

「・・・それがお前のけじめなんだな？」

その質問に空は頷いた。

すると詩音は・・・

「・・・こっちは結構うんざりなんだ・・・あまり俺を怒らせないでくれよ・・・」

頭をダルそうに掻きながらそう小さく呟いた。空に聞こえない程度に。

「？」

何を言ったか聞こえなかった空は首を傾げるが、詩音は急に人が変わったように空の方を苦笑いしながら向いた。

「いや、何でもない。まあお前が言うなら仕方ないか・・・」

そう呟きながらずっと握り締めていた銃をまた空に向けた。勿論実弾も入っている。

それを見た空は覚悟はしたがやはり恐怖には適わず目を閉じた。

引き金に指をかけ、既に慣れた様子で引き金をすぐ引いた。

「つくー!!」

何故か詩音の焦ったような声が聞こえた。

ドンー! ドンー! ドンー!

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

目を開けてみると空の体はどこも撃たれなかった。しかし撃った音はした。だから撃ってないことはない。詩音にも目立つ外傷はない。探してる途中詩音が空の真後ろを指差した。

そこには三発、撃った跡があった。

「お前……」

すると詩音は不器用に

「あー……撃ち間違えた」

頑張つて誤魔化すように言った。

それを見て空はすぐに口を開いた。

「な「何で？なんか言わせねえぞ。理由は一つだ」？」

「俺は平和主義者だからさ」

それを聞いた空はきよとんとした顔をする

「……ちよ……何だよその理由？決めて言うことじゃないだろ」

「そついう奴だからさ」

「はは……そつか」

「んじゃ行くぞ」

「そつ……だな」

「次、こんな事になったら……。まあいつか」

「え？……何か怖いんだけど」

「冗談冗談」

「……あ……ああ」

「……あのさ」

帰ってる途中、途端に空が口を開いた。

「今度は何？」

「お前、何であんなところにいたんだよ？」

「筆箱取りに行ってたら中に入った」

「………は？」

「あー……ハア……。細かい事は明日話す」

「………んああ」

ようやく空間内から出られた詩音達。

「………やっと出れたか」

「………」

「………んだよ？」

「あついついや！んじゃ明日な！！」

「……………はいはい」

空と別れた後。

「……………あの時。俺が手を無理やりにも動かさなかったら俺は本気でアイツを撃ち殺してたんだな。……………あそこまで感情を動かすなんてどうしたんだ？一体？……………。まあ、とにかくこんなもんで揺るぐわけ……………いかないよな」

## 10 空のけじめ 詩音の優しさ(後書き)

こうして空パートは完!!

何と言うか詩音の性格が掴めなくなってきた・・・。

まあとにかく空がようやく戻って良かったです!!

最後の詩音の独り言。一体何を話していたのでしょうか？  
気になるところもあります。

次回は日常編に戻ります。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしく願います

## 11 空の変化 新たな出会い（前書き）

前回までのあらすじ

ようやく空自身が自分の本音を受け入れた事で今回の事は幕を閉じた。

そして詩音が最後に何かを言い残して帰って行った。

一体どういう意味なのかも分からず、長かった一日は終わる。

そして次の日。

空が気持ちを改めていた。

それでは本編どうぞ

## 11 空の変化 新たな出会い

そして一件から一日経った次の日。

その日は休日だった。

詩音の場合

詩音は休日にも関わらず学校の門前で一人立ち尽くしながら学校を見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で学校を見ながら悩むようにして思考を巡らせる。

昨日のあれは？一体？・・・・・・・・。

深夜12時になると、開く扉。

何のために？こんな事が？

もしかしてあの瞬きしたのと何か関係が？

いやいや、あれは偶然かもしれない。関係があるとは限らない。

じゃあ何だと言える？

・・・・・・・・それはまだ分からない。

あの空間内だと本音が出るのか？・・・・・・・・。

けど、それは気付いていた。

俺も・・・・・・・・分かってたから。

・・・・・・・・もしかして俺の本音もあの中に・・・・・・・・？

繰り返し自問自答。



けど何一つまだ分からない。

……まだ一回しか入ってないから何も分からないよな。

結局の答えはその一つに限る。まだ分からない事だらけだから。

今まで学校しか視界に入っていなかったが、初めてそこで学校の周りの見渡す。

すると学校からそう遠くもない場所に墓場が見えた。

「そっいや……墓参り……だっけか？」

空の場合

空の姿は花屋の前にあった。

片手には花屋で買った菊の花。

もう片方の手には四葉のクローバー。茎の部分を器用に回しながら目的地へと向かう。

フウ……と深呼吸をしながらその前に立ち尽くす。

そしてまるでそこに人が居て、その人と久しぶりに話すように呟く。

「あー……えっと、久しぶりだな」

目の前にあるのは

「怜、元氣？」

誰よりも大切にしていた幼馴染の墓。

「あー……えー……、何か今まで来れなくて……その……  
ごめん」

そう言いながら菊の花を供える。

どうにかして言葉を言おうとするが、なかなか何を言えばいいのかよく分からず思うように口が動かない。

「その……、今日来たのは用事があったからなんだけど……さ  
「……ハア」

溜息をついた。まるで何か大事な事を、いや決心をするように。

「単刀直入に言う」

「俺、今までお前の事全然考えてこなかった。俺の事しか考えてなかった。お前がどうすれば喜ぶ、とかどうすれば約束を守れる、とか」

「だけど、それは全部考えていても自分の事しか考えられなかった  
言い訳だった」

「……その言い訳も、もういくら心に染み付いても、いく

ら受け止めても、気付けなかった。それでいっぱいはいの俺にはどうする事も出来なかった」

「だから……この一言に全ての思いを寄せる」

「今まで、ごめん。今まで、ありがとう」

「……はは、何でこんな事が俺はお前に言えなかったんだよ。俺、お前に今まで顔向け出来なかった。違う、しようとしなかったのかもしれない」

「だけどな、今はこうして顔向け出来るようになったんだ。それと人に対する目とか自分の中で改めたり、それとかちゃんとした友達が出来たり、今までやってた事がもっと……楽しく……なった」

「……」

「俺さ、あと一つ重要な事に気付いたんだ」

「そのさ……」

ようやく開かれた口もまた閉じた。

そしてまるで女子のように恥ずかしそうに俯きながら呟く。

「今はもう伝えられないけど、色々、お前のためにしたいって……。その、俺さ」

「お前の事……その……あの……す、す……」

そこで一旦言葉を止め、今まで以上に大きく深呼吸をし

「お前の事好きだ!!」

そこで風が吹く。

一つの墓の前には今現在進行形で、青春をしている一人の少年。顔を真っ赤にしながら菊の隣に持ってたクローバーを置く。

「何にお前告白してんだよ」

「.....」

そんな少年の横から聞き覚えのある声が飛んできた。

瞬間、少年の動きが止まる。

そしてぎこちなく顔を横に動かし、言葉を飛ばした少年を見た。

「う、うわああああああああああああああああ!!!!」

「!!」

少年は赤面しながら叫ぶ。

もうそれは正に悲鳴に近かった。

言葉を飛ばした少年は耳の中に指を入れながら呆れたような顔をしていた。

「・・・・・・・・五月蠅い」

言葉を飛ばした少年、それは詩音だった。

詩音はさつきまで学校の前で思考を巡らせていた。

それが終わりふと、学校の近くに見えた墓場に行った。

もしかしたら空がいるかもしれないと思い。

「・・・・・・・・ごめん」

「んで、誰に告ってんだよ？」

「え？・・・・・・・・えーっと・・・・・・・・、あの・・・幼馴染」

「ふーん・・・・・・・・」

「興味なさそうにするなら聞くなよ!!」

「興味ないとは一言も言っていない。お前の本音と関係は？」

「大アリ。コイツのおかげでこうなったから・・・・・・・・」

「・・・・・・・・何があった？」

「え？・・・・・・・・あーえっと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・まあ話したくないならいい」

「い、いやちょっと待て!!話す話す!!」

「あー、ちよつと待った」

「え?」

「どっか座らね?」

「・・・そ、そうだな」

そう言いながら二人は墓場を抜け、近くの公園のベンチに座った。

「で?」

「あ・・・ああ。小さい頃に怜っていう幼馴染がいた。ソイツは生まれつき体が弱くていつも病院にいて学校もろくに行けなかった。だから俺は毎日見舞いに行ってたんだ。毎日、毎日その日にあつたことを話した。怜も凄く楽しみにしてたから俺も楽しかった。だけど時々言ってきたんだ。「私、弱くてごめんね」って。だからその時約束した。「じゃあ俺が誰よりも強くなつて守つてやる」って。絶対に破らないって決めた。けど、怜は日に日に弱っていった。入院した当初は外にだつて出れたのに外にだつて出させてもらえなくなつた。俺も必死に訴えたけど、無理だった。それである日、俺がいつも通りに病院にいったら何か妙に騒がしくて、不安に思った俺は急いで病室に入った。けどその時にはもう・・・」

「・・・そっか」

「・・・その様子だとやっぱり興味無かつたんじゃ?」

「いや、別に理由が分かつてそれでokだろうと思つて。お前の事だし俺が口出しする事じゃないだろ」

「……………詩音って呼んでいいか？」

「……………」

「俺、お前に助けられたから少しでもお前の役に立ちたいんだ！」

「……………勝手にしろ。けど、お前のその役に立ちたいという思  
いはいらぬい」

「え……………何で？」

「俺は一人で出来る。それに役に立ちたいっつゝ気持ちでそうなっ  
たんだろ？なら気持ち、改める。よく考えて物を言え」

「お前つてさ」

「何だよ？」

「……………何でそう色々押し殺してんだ？」

「俺が何しようがお前には関係ない」

「そういう所を言っただよ。一人で解決するとか、それに今だっ  
て……………」

「……………」

「何っつゝか感情を無くしてる感じがするっつか、わざとそういう  
風に俺と接してる感じがする」

瞬間  
ピクッ

詩音のこめかみが微かに動いた。

「……………知るか」

「……………そうだよな。あっそっぴや聞きたい事があつたんだよ」

「今度は何？」

「昨日筆箱がどうのここの話してたやつ」

「……………昨日学校に筆箱に忘れたんだよ。誰もいない夜中に取りに行ったらあの扉の中に入った。あと、途中お前を見た」

あつた事を淡々と話す詩音。

「え？」

「現実でだけどな。何か虚ろな感じだった」

「俺の意識が戻ったのは変な空間に入ってからだった……………」

「ふーん……………じゃあれは向かう途中か」

「……………だな」

「……………」



「なあ、俺って変わった感じとかする？」

「……ウザイのが無くなった。けど、馴れ馴れしいのは変わらない」

「はは……。そっか……」

「……でも」

「え？」

「自分の感情で動いてる感じがする」

「それって……」

「俺に頼るな」

「あー……じゅめん」

「……じゃあ」

「ん？」

「お前は俺の事どんな奴だと思ってんだよ？」

「え？……何と云うか、変な奴だけど実は凄く、誰よりも強く優しい奴……とか？」

「優しい……かあ。ふーん……」

「間違ってる?」

「何だよ?」

「いや、何か曖昧な返事だったからさ・・・」

「間違ってるも何も・・・。お前の意見を聞いたのにそれに答えなんてあるかよ」

「・・・そうだよな・・・」

「お前さ、もう少し自分に自信持てよ」

「自信・・・?」

「そんなオドオドしているとまた変わるぞ」

「・・・自分を強く持てって事?」

「そう。自分の中に一本強い芯を持って。あんな本音に揺らがないよな、決して折れない芯を持てばいい。それ一つで、変わる」

「・・・詩音って何でそんな折れない一本の芯を作れるんだ?」

「そんなの誰にだって出来る。やろうと思えば」

「・・・いいよな。俺も憧れるわ」

「・・・俺には憧れるな」

「いや、たまたま言っただけというか……」

「……俺の芯は腐ってる。立ってるんじゃない。心に生えてる。抜こうとしても抜けない」

「……」

「だから懂れるな」

「……分かった」

「……お前は」

「俺は、何？」

「お前はさ、俺のそういう所聞かないんだな」

「……お前が言いたくないんなら聞かない。それにまだ俺もお前の事、全然分かんないしな」

「……」

「だからお前から来るの、待ってるから」

「お前のそういう所は……嫌いじゃない」

「あ……ああ。ありがとな」

そしてまた空が口を開こうとした瞬間だった。

詩音の元にコロコロとボールが転がってきた。

「ボール……？誰の？」

二人して公園内を見渡していると、一人の女子が二人に向かって走ってきた。

「あ、あのそのボール下さい」

その女子は赤ぶちメガネにメガネから覗く黒い瞳、短い黒髪、黒いワンピースにジーンズ、おまけにサンダル。なんというか地味な容姿だった。個性が一つも無さそう。

だけどその地味な容姿には空は見覚えがあり、名前を言う。

「仲野！！」

「ふっふえ？！はっはい！！」

その女子、仲野は空に名前を呼ばれ驚くようにして返事をした。その空の様子に詩音は疑問を抱いた。

「知ってるのか？」

「いやいや、知ってるも何も同じクラスだろ？！」

「同じ……クラス……なのか？」

「ああ。仲野黒奈だよ。お前……本当にそこら辺は興味がないんだな……」

「まあ……俺には関係無いし」

そう言いながら詩音は黒奈にボールを返した。

「え？……あの、もしかして……葛城君と永井君……？」

「やっぱり！仲野か！！」

「はっはい。二人はどうして？……」

「あー……えっと、ちょっと話しててさ」

「話……？」

「………大事な話」

「そうそう！！大事な話しててさ。んで仲野は？」

「あ、私は買い物から帰るときに……あの子達に遊ばうって言われて、遊んでたんです」

黒奈の視線の先には子供達が遊具で遊んでいた。

「そうだったんだ。てか、何か仲野って見かけによらず結構喋るんだな」

「あ、えっと私、人と喋るの好きですから。二人は仲が良いんですね」

「え？ああ・・・まあな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「葛城君って無口・・・なんですね。お喋りな永井君と・・・仲が  
良いなんて驚きました」

「まあ・・・な。コイツ照れ屋だからさ」

「・・・・誰が照れ屋なんて言った」

「悪い悪い。んじあ俺たちそろそろ行くから」

「あっそうですか」

「明日学校で」

「はい！」

帰る途中

詩音と空は途中に見つけた自販機で詩音はミルクティーを買い空は  
カルピスを買ひ、詩音は自販機に寄つ掛かり、空は隣にあったベン  
チに座つてまた話していた。もう既に夕暮れになっていた。

「詩音はまだ帰らなくて大丈夫なのか？」

「・・・ああ。お前は？」

「俺は別にいつもぶらぶらしてるから帰らなくても帰ってもどちらでも」

「親とかは？」

「特に心配しない。俺、親嫌いだし」

「ふーん・・・。ならいいか」

「そっぴゃ、詩音何で同じクラスの人覚えないんだよ？」

「・・・興味ない。・・・お前こそあんな地味な奴、よく覚えてたな」

「まあ、俺前はああいう性格だったからクラスの全員の名前覚えてたんだよ」

「・・・てかお前女子と話して、浮気？」

「ゲホゲホ！！！」

カルピスを飲んでいた空が盛大にむせている。

「・・・凶星？」

「違っわ！！てかお前はいつまでそれを引っ張るんだよ！！！」

「……お前が幼馴染が好きなのは事実だろ。あんま浮気すると呪い殺させるぞ」

「別に、俺がアイツを好きなのは誰と話してようが変わらないし」

「……ふーん」

何処か上の空のような感じに返事をする詩音。  
それに不思議に思った空は

「どうした？」

「……いや、人を好きになるってどんな感じなのかって……」

「

え？」

「……あついや別に何でもない」

「そっか……」

「んじゃ俺は帰る」

そう言いながら体を立たせる詩音。

「あ、そうするか」

「じゃ」

「明日な」



そこで二人は別れを告げた。

## 11 空の変化 新たな出会い（後書き）

戻ってきた普通の日常。

そして気持ちを变える空、何かを変えようとする詩音。

また二人の距離が縮まった。

一つずつ素直になる空とは反対に、詩音は空と今まで以上に近づいたが何処か離れるように接する。

一体彼にはどんな本音があるのだろうか？

今回から新キャラ登場！

仲野黒奈、彼女は一体？・・・。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願ひします

## 12 予兆（前書き）

前回までのあらすじ

久しぶりに感じた休日。

詩音、空、それぞれの過ごし方で休日を過ごしていた。

詩音は学校を探りに行き、途中に近くの墓場へ。

空は墓参りに行き、怜に伝える事を伝え。さらに告白までした。

その場を見ていた詩音は空に声をかける。

そして空は詩音と話しているとある事に気付く。

詩音はわざと接する事を避けようとするような振る舞いをし、感情を抑えているように。

話していると同じクラスの仲野黒奈に会う。

彼女は黒一色という地味キャラだが、彼女の事を知っていた空が声をかけると黒奈は二人の事を分かった。

そして何ともない会話をする。黒奈と別れた。

帰る途中話していると詩音がふとある言葉を口に出した。

「人を好きになるってどんな感じなのかって・・・」

彼は人を好きになったことがないのだろうか？

彼は家族に対してもノーコメント。

一体詩音はどんな風に人に対して思っているのだろうか？

それでは本編どうぞ

## 12 予兆

次の日。

欠伸をしながら気だるそうに通学路を歩く詩音。  
そんな詩音の元に走る女子が一人。

「おはよう……ございます」

「ああ……中村」

「違います!! 仲野です」

「あーはいはい」

「一人ですか？」

「あー……ああ」

相変わらず気だるそうに返事をする詩音。  
だが彼は人一倍黒奈が嫌いだった。

何かめんどくさい……。

ウザイし付き纏ってくるし。

俺に何の用事があるんだよ。

しかもチラチラ人の様子伺いながら話しやがって……。

まだ永井と話してた方がマシだ。

……さっさと教室行こ。

「あの、葛城君」

「?・・・・・・・・」

「私も永井君と葛城君の中に加わって・・・・・・・・良いですか?」

「・・・・・・・・はあ?」

何、調子に乗ってるんだよコイツ・・・・。

仲間に入りたいてってガキか。

しかも仲間になんか入れたら俺がウザイと思ってもあのバカ(永井)が楽観的にいいよゝなんて言うだろうな。

ハア・・・・嫌な方にしか思考が進まない。

ホントにコイツ、何が目的なんだよ・・・・。

永井みたいならまだしもコイツの場合永井とは反対だぞ。

・・・・・・・・依存か。

・・・・・・・・益々気に入らない。

「・・・・・・・・断る」

「何で・・・・・・・・ですか?」

「ハア・・・・・・・・俺がお前と仲良しこよしなんかしていなくちゃいけない理由でもあんのかよ?それがあるならさっさと答える」

「え?・・・・・・・・えつと・・・・・・・・」

「何だ?理由は依存か?」

「ッ!!!」

「凶星か？バレないでも思ったら大間違いだぞ。お前のその依存してる感じが滲み出たよ。しかも人の様子チラチラ伺って、俺に付き纏うな」

「え……あ……はい」

すると黒奈は急いで詩音の横をすり抜け教室に向かった。

「……………」

詩音はその後ろ姿を特に何も思わず、見ていた。

「詩音？」

早くも朝の一件が終わり、4時限目が終わり、昼休みになると空は詩音の席へと向かった。

「寝てる……か」

相変わらず寝ている詩音。

授業中も教師に何回もチョークを投げられたり、揺すられたり、教科書で叩かれたりはしていたがその度に一応起き、またいつのまに

やら寝ている。

本当にコイツ留年はしないのだろうか？

空は詩音の前で立ち尽くしながらそんな不安を募らせていた。

気持ちよさそうに爆睡している詩音を見てみると、ノートに何かを書いていた。

「ぐぬぬ……」

詩音が乗っかっていて、途中見えず、それなら！と思いノートを引き抜く空だが

「ぐぬぬう！！……」

なかなか引き抜けない。

だが

「うお！！」

ようやく引き抜けた。

ノートをぺらぺらと捲っていく。

見る限りだと何だかんだ言っつて、ノートは写しているようだ。

だが、途中寝そうになったのか文字が急に読めないようになったり、書いてる途中であらぬ方向へペン先が行くようにしてグチャグチャになっている所が何箇所もあった。

そして一番最後のページにソレはあった。

この一番最後のページは多分今日書いた奴だ。

「え？・・・」

絵だった。

画力が無いのは十分に分かったが、大事な事は伝わった。

子供が狂気に満ちている。

だけど子供は血塗れ。怪我だらけ。ボロボロ。

そして急に泣き出し。

無表情になった。

これは一体・・・？

まだ次のページにも続きが書いてあり、捲ろうとした瞬間

「何・・・してんだ？」

その声は前から聞こえた。

ノートを一旦閉じ前を見てみると詩音が起きていた。

「いついや、その・・・」

「ッ！！！！」

空が持っているノートを見たその時詩音が初めて驚きの表情をした。

そして空の手からノートを奪い取るように取った。

急いでノートを捲り、何かを確認する。

「お前、どこまで読んだ？」

明らかにいつもと顔つきが違った。



「え……えっと、子供が表情を変えるとこ……まで」

すると詩音はいつもの顔つきに戻り

「……………そうか」

と言いながらノートを閉じた。

「……………んで?」

「え? ……あーえっと……………」

「何?」

今でもどうも言葉を出しにくい空だが詩音はそれからも顔つきは変わらず今のが嘘だったかのよう。

空はそれを見ると怒ってない? と思い、言葉を言った。

「もう昼飯だから、一緒に食わない?」

そう言う空の手にはコンビニ袋があった。

「あ……………もうそんな時間か。ふあゝあ……………。分かった」

言葉の途中欠伸をし、頭を気だるそうに掻きながら返事をした。  
すると鞆の中にそのノートを戻し、代わりに中から何かを包んである風呂敷を出した。

「んじゃ行いっせ」

「はいはい」

二人でそう言いながら屋上に向かった。  
その姿を黒奈は見ていた。

これ程気持ちのいい所はないはずなのに人が一人もいないのは不思議。

詩音は堂々とど真ん中に座ると風呂敷を開いた。  
それについていく空。

詩音が持っていた風呂敷の中にはおにぎりが三個入っていた。  
空はコンビニ袋から焼きそばパンと鮭のおにぎりとカルピスが入ったペットボトルを出しながら詩音に聞いた。

「それお前が握ったのか？」

「ん？・・・まあな」

「ふーん・・・」

空の口からも詩音のふーん、が移っていた。

「弁当とかは？」

「時間があったら」

それぞれ焼きそばパンとおにぎりを食べながら屋上から景色を見ていた。

「お前って以外にそういうの好きなんだな」

「…………別に料理とか好きなわけじゃない。大切だと思うから」

「そう言われると料理をしない俺のメンタル丸潰れだわ」

「……………知るか」

空の予想ではごめん、とでも言っただけで済んだのだが、見事にスル  
ーされた。

「……………手料理…か…」

「……………俺、ちよつと飲み物買って来る」

そう言う詩音は財布と一緒に何かを取る動作をした。

「ああ」

「……………飯に手、出すなよ」

「……………ああ」

そう言う詩音は屋上から出てった。

焼きそばパンを食べ終わり、今度はおにぎりを食べようとする空だが、やるなよと言われるとやりたくなるのが男子。  
詩音が食べてたおにぎりに近づき、食べようとした。

瞬間

「おい」

「え？」

ガン！！

声と共に思いっきり空の顔面に何かがぶつかった。

「つてえ……」

何だ？と思いそれを離すとミルクティーだった。

「……何、人の物食べてんだよ……。お前のおにぎり、屋上から投げるぞ」

目の前には詩音がいた。

「それは勘弁……」

詩音の手にはミルクティーがあつた。

じゃあこのミルクティーは？と思つた空は聞いてみる。

「このミルクティーは？」

「……もう無いだろ」

「え？」

主語が無く意味が分からない言葉を言った詩音。だがそう言う詩音は何かを見ていた。  
空も詩音の向いてる方を見ると、そこには

「あれ？無い・・・」

さっきまでカルピスを飲み終わり、空のペットボトルを置いといたはずなのに無かった。  
空はふと思った。

じゃあこれってその代わり？

すると今度は

「・・・弁当食べたいなら作るが？」

「え？」

「答えは？」

「あ・・・頼みます・・・」

「はいはい・・・」

こうして昼休みは終わった。

そして放課後。

「？」

空がクラス内を見渡すと詩音の姿がいつの間にか無かった。帰ったのかと思い、下駄箱へ行くが靴はあった。なら……、と思いひたすらに階段を駆け上がった。

ガチャ

屋上

そこにはやはり詩音の姿があった。

詩音は空の姿を確認すると

「……帰らないのか？」

「いや、どうせなら帰らないか……？」

「……そこまで馴れ合うつもりはない」

「……」

詩音は暇そうにフェンスに寄り掛かっていた。

フェンスから見下ろすと下校中の生徒が沢山いた。

その中に黒奈の姿があった。

黒奈の周りを見ると、女子が沢山いた。

多分同じクラスの連中だろうと思い見ていた。

欠伸をしながらふと瞬きをした瞬間。

!!

ガバツ!!

詩音は勢いよく空に振り返る。

「おい、永井」

「え?・・・」

「・・・俺は仲野を助けるがお前は?」

「!!・・・、それって仲野も?」

「・・・ああ」

「助けるに決まってる」

「・・・そっか」

詩音の中だとその答えは最悪に近かった。

## 12 予兆（後書き）

詩音は黒奈を助けようと思って、本当に助けるのか？  
ノートは何なのか？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願いします



### 13 詩音の反抗（前書き）

前回までのあらすじ

休日から一日明けた次の日。

学校に向かう途中通学路で詩音は黒奈に会う。

だが黒奈は会った日からどうも気に入らないらしく相当嫌っていた。彼は黒奈の感情も少し分かっていた。

昼休み、空は詩音の方へ行くが詩音は相変わらず寝ていた。

だが空はそんな時ある物を見た。

それは詩音のノートだった。

そこには子供が変わっていく絵が書いてあった。

その次のページを捲ろうとした瞬間詩音が起きた。

だが彼は空よりもそのノートに目が行く。

それを見た詩音の表情は今まで見た事がない表情だった。

空は少しそれに恐怖感を感じたが、質問に答えると詩音はいつも通りになった。

そして昼食はいつもより、他愛無い話で盛り上がっていた。

また詩音と空の距離が縮まった。だが詩音が本当にそう思っているかは分からない。

放課後、詩音は黒奈の本音の姿を見る。

それを見た詩音は空に問う。

助けるか？と

それに空は頷いた。

だが彼は本当に助けるのか？

それでは本編どーぞ

### 13 詩音の反抗

バンツッ！！

空は屋上のドアを勢い良く開ける。

後ろから詩音がついてくるが、走っている空とは違い歩いていた。

「おい！詩音！！」

「・・・・・・・・何」

明らかに機嫌が悪い。

一体どうしたのか空には分からなかった。

「早くしねえと仲野が！！」

「・・・ハア・・・つるせえな・・・」

ボソッと詩音が呟いた。

「え？」

瞬間空の足が止まった。

「・・・・・・・・・・・・行くぞ」

詩音は足を止めている空の横をすり抜ける。

「・・・・・・・・」

空も行くとうとする。だが

本当にこれでいいのか？

これでいいのか？！

アイツはもしかしたら仲野を見殺しにするかもしれない！  
なのにそれを止めなくても良いのかよ？！

それでいいのかよ！！

ダメだ！ダメに決まっている！！

だからここで・・・・。止める

瞬間

ギリッ

空が齒軋りする音が聞こえた。

それと同時に空は詩音の首元を持ち壁に押し付けた。

「・・・・ツ・・何するんだよ・・・・。助けにいかないのか？」

「その前にしとかなきゃいけない事がある。お前、今の言葉、何だよ？」

「・・・・・・・・」

「聞こえないとも思ってたのかよ？」

「……別に前に向けて言ったわけじゃない。前には関係ない」

空の歯軋りがどんどん強くなる。

「……ふざけんなよ」

「は？」

「何が関係ないだよ！！そんな気持ちで行けると思ってるのかよ？」

「……あの空間内でどんな気持ちでもいいだろ。だからそんな関係ないって言うてんだろ」

「だから！！……だから！！……何だよ……関係ないって……」

「だからはこっちの台詞。前がもしここで俺を止めるだけならついてくんな」

「ッ！！」

「ウザイと思うならついてくんな」

「……お前、何でそこまですんだよ？」

「何を？」

「何でそこまで一人で全部やろうとすんだよ」

「はぁ？……マジで何言ってるのお前？」

その変わった口調と共に表情が出た。それは昼間ノートの時の表情。

「……もういい。これは今度にする。だけど一つだけ聞くぞ」

「何？」

「お前さっきから何で仲野の事嫌ってたんだよ？」

「……そんなもの決まってるだろ」

「？」

「俺はアイツが大嫌いなんだ」

「……そうか。だけど嫌いでも、助けるならちやんと助けるよ」

「……」

「……いいか？」

「……あぁ」

表情が見えないまま、詩音は返事をした。

「……………んじゃ12時前に門前」

詩音はそう一言だけ言つと下駄箱に向かって歩いて行った。

夜中、門前

先に詩音が来ていた。

空が来ると、チラ身だけして、門をよじ登った。  
それに空も続く。

そして

キンコーンカーンコーン……

鐘が鳴った。

二人共無言のまま中に入る。

途中

「つて！」

空が何かに躓いたようだ。  
だが詩音は無言。

「ちよ……待て……」

「ッチ、早くしろ」

舌打ちをしながらそう言つと鞆の中から海中電灯を出して、空に向かつて投げる。

「……………あ、サンキユ……………。お前は？」

「慣れてる」

そう一言だけ答えた。

「あ……………そう」

そして無言のまま歩いていくと、ようやく教室の前に着いた。

そこには虚ろな黒奈の姿があった。



### 13 詩音の反抗（後書き）

二人が本音をぶつけ合うにはまだ少し早いらしい。  
だけど、その内二人もぶつからなければいけないと思う。

次回、ギクシャクな状況の中、詩音が黒奈に言う。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願いします

## 14 詩音と黒奈（前書き）

前回までのあらすじ

黒奈を助けに行こうとするが、詩音の様子がどうもおかしかった。不安に思った空は詩音を急かすが、詩音はその時呟いた。

「るっせえな」

その言葉を空は聞き逃さなかった。それにキレた空は詩音に問い詰める。だが、詩音は黒奈が嫌いだけだった。そこまで詳しくは聞けなかった。

結局は助けに行く事にはなったが、いつか二人でぶつかりあわなくてはいけない。

そしてゲートが開いた。  
だが二人共無言のまま。  
そんな中教室の前に黒奈がいた。

それでは本編どうぞ

## 14 詩音と黒奈

「いた……………」

「……………」

だが黒奈は明らかに虚ろだった。  
名前を呼んでも多分気付かないだろう。  
どうにかしないといけない。

「……………」

「おい……………」

もう既に策があるようで黒奈の方へ向かう詩音。  
空は殺さないか心配だった。

そして詩音は手に力を入れると

ドスッ

首の後ろをぶっ叩いた。

「ッ！！！！」

そのまま黒奈は気絶した。  
それは明らかに強硬手段だった。  
何故そんな事をしたのか空にも分からない。  
確信した。

本当に詩音は黒奈を殺しかねないのかも知れない。

「お前……もつと良い方法無かったのかよ？……」

「今はこれしか無い」

即答だった。

「そう言える理由があるのかよ！！」

「お前こそコイツを殺したいのか？」

「ッ？！」

「この女子には今、声は届かない。名前を呼んでも無駄なはずだ。なら気絶させるしかない。中に入れたくないなら、あとは殺す事も出来た。別にコイツが一人、本音に潰されようがこの学校には一つも支障は出ない」

「支障は出る！！」

「……」

「コイツの親はどうするんだよ！！コイツの友達は？！人事じゃないんだよこれは！お前にとっては他人かもしれないけど、コイツもクラスメートなんだぞ！関係無くないだろ！！」

「ソイツは誤解だ」

「は？」

「コイツは人に依存してんだよ」

「・・・依・・・存？」

「だから俺はコイツが嫌いなんだ」

「お前・・・それはただの私情だぞ」

「・・・」

「お前のその勝手な私情で仲野を殺すのか?!」

「・・・俺には関係ない」

「だから関係なくない!!!」

「・・・」

「・・・っう・・・」

二人が騒いでいると黒奈が目を覚ました。  
すると詩音は黒奈から離れた。  
空は逆に黒奈に駆け寄る。

「大丈夫か?・・・」

「あっはい・・・」

「よかった・・・」

「何で永井君？」

「詩音もいるけどな・・・」

「え？・・・葛城君も・・・」

「何だよ？その言い方？詩音と何かあったのか？」

「あつ・・・い、いえ」

「？。ならいいけど」

「それより・・・二二二つて？・・・」

「ああ、二二二学校」

「学校？・・・何で？」

「それはまた今度説明する。いいから行二二二」

「あ・・・はい」

「・・・」

すると詩音が黒奈に近づいた。

「ッ・・・」

黒奈は怯えるようにして詩音を見た。

「お前さ、どんな理由でそんな依存症になったかは知らねえけどさ。んな風に振舞ってたらいつか一人になるぞ」

「……そ、それは……」

「分かってんのに、止められないってか。麻薬やってる人間みたいな事言うなあんた。そこまで依存していると自分でどういう結末迎えるか知ってるんだろ？」

「……」

「……今からでもいいから自立しろ」

「……」

「……お前のそういつとこ見てると、益タイラつく。今からでも死ねと言つて殺したい気分だ」

「ッ!!……そうですか……」

「ああ」

「おい!!……」

「ここで止めないでお前は中に放り込めって言つのか？」

詩音は空の方を剥かず聞いた。

確かに、そうだ。

「ここで少しでも自立をさせればもしかしたら、ゲートが閉じるかもしれない。」

「……………」

「私……………そういうの無理……………なんです」

「そういう経験は？」

「何回も……………ありました」

「なのに変わろうともしないのかよ？」

「……………はい。怖いんです」

「……………じれったい」

「……………」

「お前さ、そういう風にしてると誰も助けてこなくなるぞ。そうして孤立無援で死ぬんじゃないかねえの？結局今の一步踏み出せないって事でこれからずっとぼっちな生活だ。寂しいなあおい、寂しいなあ本当に」

「……………」

「……………ハア、今の俺からのチャンスが無駄にしたんならもうお前にはその意思はないって事だな」

「え……………」



「だって俺の言葉に反論しようとしなかったじゃねえか。ならもう無理ってことだ。俺も手がつけられない。もう無理だな」

「無理……」

「お前さ、ここまで言われて悔しくないの？私は違う！とかも言えない？それともその口が開かない？いや、違うか。ここで俺にもっと嫌われたら嫌だもんな」

「ッ！！」

「だからその場に合わせればいい。……自分の意思を放っておいて、か？」

「……自分の……意思……」

「……以上。もう疲れた。あとは自分で頑張れ」

そう言いながら詩音は先陣きって帰って行った。

そして空もふと帰り道を照らした。

瞬間

ガッ！

「ッ！！」

ズルズル……。

「きゃあっ!!」

グイッ!!

「助けっ!!」

シーン……。

「!!!!!!」

「……………」

バツ!

空が急いでそちらを照らしたがそこには黒奈の姿は無く、変な空間への扉が誰かが入ったように波紋が広がっていた。

#### 14 詩音と黒奈（後書き）

詩音が言ったのは励ましか？憎しみか？  
それは黒奈にどう影響したのだろうか？  
そして消えた黒奈の行方は？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしく願います

## 15 思考巡り（前書き）

前回までのあらすじ

詩音は初めて黒奈に言いたい事を全て言った。

それは皮肉な言い方。相手がムカつくからこう言ってやるといって、子供な精神。

でも彼なりに自立をしてほしいのだろうか？

そしてようやく帰ろうとした瞬間黒奈が悲鳴を挙げた。

けど、そこには黒奈は居なかった。

代わりにゲートに誰かが入ったような形跡があった。

それでは本編どーぞ

## 15 思考巡り

その扉を見た詩音は

「……………」

無言のまま去ろうとした。

「ちよつと待てー!!」

急いで詩音を止める空。

だが詩音は何も思っても無く、ただ嫌だ、という子供精神だった。

「何?」

「何?じゃねえよ!!仲野、助けねえのかよ!!死ぬぞアイツ!!」

詰め寄るように言葉を吐く空。

「…………それは好都合」

そしてまた帰ろうとする。

「だから待てってー!!」

「……………」

「俺たちは助けけるために来たんだろ？何で帰るつとするんだよ！」

「帰りたいから」

「お前は……、もうちつと頭を冷やせ!!」

「……」

「俺は先行ってるから、お前も来いよ!!」

「……」

ズブズブ……

空は一人ゲートに入って行った。

仲野黒奈のゲート

「う……う……ん？」

「……私どうしたんだっけ？……」

『……一人は嫌だ、孤独は寂しいよぉ……』

「！！誰ですか？あなた」

『……その敬語も場任せでしょ？』

「違います！私は！！」

『……私は……何？』

「私は……！！私……は……」

『ほーら、凶星！そうって最初から言えはいいのに』

「私は頑張ってますよ！頑張って踏み出そうと……」

『は？どの口が頑張ってるなんて綺麗事吐いてんの？弱虫のくせに、強がるなよ』

「……弱虫？……」

『あれ？自分の事なのに気付かなかったの？そう、私は弱虫。あのね私っていつもこうだから居なくなっても誰も気付いてくれないんだよ』

「ッ……！！」

『いつつも人にくつついてるから自分がいないの』

「……………」

『あー寂しい、寂しい……。でも私って踏み出せないんだ、弱虫だから』

「……………これも弱虫だから……………」

『だから……………』

「え？」

『そんな弱い私はいらないの』

ドスッ！

タッタッタッタッタ……………

「何でアイツはああまでして嫌なんだよ……………」

確かにうじうじしてるのは嫌いそうなタイプだけどあそこまで言う必要ないだろ……………。

でもアイツがああまで嫌う理由が他にもあつたらどうする？  
逆に……………アイツが苦しんでたら？



「……んな訳ない!!」

「アイツはあそこまで仲野に言ったんだ！」

「アイツが悪い!!」

「……. . . . . だけど、詩音は……。」

「また詩音は悪者……なのか？」

「……. . . . . 俺、どっちにつけばいいんだよ?……」

空が思考をひたすらに巡らせていると、声が飛んできた。

『何で人がいるの?!』

「ん?」

空が前を向くとそこには

「やっと見つけた……」

黒奈がいた。だがそこにいたのは空間内の黒奈だった。

「仲野は何処にやった?」

『……. . . . .』

彼女は震えながら指を差した。その先には

「そんな……. . . . .」

黒奈のナイフが刺さってる死体があった。刺傷からどんどん出血しててしてて、周りは血の海だった。

「お前がやったのか？」

『そつだよー！』

笑顔を絶やさずこつも続けた。

『きつとアレも思わなかったよね。自分が自分を殺すなんてさ。あつ信じてなかったりしてる？ならホラ』

と黒奈はまだ着いたばかりの赤黒い液体が刃から滴り落ちているナイフを懐から出した。

「……てんめえ！！」

直ぐにバットを出し

「アヴィリテイ・ヴァン！！」

バットを鎌に変えた。

瞬間

先に空が動いた。

特性の速さを力にし、いつの間にか空は黒奈の目の前にいた。そして空は鎌を下から上へ振り上げるようにしたが、

ガンツ！！

黒奈は直ぐに反応し、ナイフでその攻撃を受け止めた。バチバチツ

！！と金属がぶつかり合うような音を鳴らしながら火花が散っていた。

するといきなり黒奈が力を弱め、そのチャンスを感じた空は上から下へ鎌を振り下ろしナイフを抜うようにした。

瞬間

「！！」

その頃詩音は

「……………何なんだよ……………ホントに……………」

一人、頭を掻きながら呟いていた。

ゲートを見つめながら。

そしてゲートに手を入れる。

空の視界に新たなナイフが見えた。それは直線的に自分の喉を突き刺そうとしているのが直ぐに空は分かった。

「くっ！・・・！！がはっ」

だが避けた空に新たな痛みが襲った。

それは自分の腹の部分に何かか背中にも腹が付くぐらいの勢いで腹の限界に当たるようにメキツと音がするように、背中にある骨がバキツと折れるような音がするようにめり込んだ。

たった一瞬だったがまるで呼吸するのを自分の体が拒否するように酸素が吸えず二酸化炭素が吐けなかった。まるで過呼吸のような感覚だった。

空は痛みの正体を見ようとした瞬間、今度はそれと同じ感覚が横腹に起きた。

だが感覚を確認する間もなく、またそれが頭に来たり顎に来たりと攻撃の嵐をくらった。

「あ・・・くっ・・・つつ・・・かはっ・・・」

既に空は足がフラついていた。体中痣だらけ、鼻血をポタポタと流して見ているだけで痛々しい。

『つまんな。弱すぎるでしょ。そんな脆い壁はさっさと倒す』

そう言いながら黒奈は空に無数のナイフを持てるだけ持ち構えていた。

そして

シュッ！

一瞬にして全てを、空に向かって投げた。

空は自分に向かってくるナイフにどうにも出来ずに瞬間的に頭だけでも守ろうとして手を頭に構えた。その恐怖に耐え切れず目を瞑りながら。

## 15 思考巡り（後書き）

一人で入った空だが危機？！

詩音は間に合うのだろうか？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。

これからもよろしく願います

## 16 嘘と悪者（前書き）

前回までのあらすじ

黒奈が居なくなった後、詩音が「それは好都合」と言いながら帰ろうとするが、それはおかしいと思った空が詩音を止める。

「俺たちは仲野を助けるためにここに来たんだろ！！」

そう言ったが詩音は相変わらずうん、と言わなかった。

それに不満を思った空は一人ゲートの中に入る。

ゲートの中に入った空は考えた。

ああいう風に言う詩音が本当に悪いのか？ だけど、あそこまで言う必要はないはず。

だから詩音が悪い。

だけど……、詩音はまた……悪者に？

空の中で思考が巡りに巡っていた。

そんな中、中に入れられた黒奈は自分の本音と話していた。

だがあまりにも黒奈自身が拒否をするのか、黒奈の本音は彼女とは真反対。

そして、ナイフで刺される。

その頃、詩音は一人ゲートに入って行った。

刺された姿を目撃した空は黒奈の本音に掴みかかるように攻撃をす

るが、やはり無理がある。

・・・無数のナイフが全て空に襲い掛かる。

それでは本編どうぞ



## 16 嘘と悪者

ドスツ！ドスツ！ドスツ！ピツ！ベチャツ！ピツ！ベチャ！

空の耳にナイフが刺さる音がひたすら聞こえ、体に生暖かいに何か  
が着く。

全て、感覚が何故があった。

刺されたような痛みも不思議と感しない。

目を閉じたままだったが、空の鼻は何かの臭いを嗅いだ。

鉄のようなツンツとする臭い。

明らかに血の臭い。

そう分かった瞬間空は目を直ぐ様開く。

まず、自分の体を見る。

「生きて……る？」

鼻血のおかげで下に血溜まりが出来ていた。

だが体の何処にも刺されたような傷はやはり無い。

あちこちに血が着いていた。

だが血が着いている所はどこも痛くない。

だとすると答えは一つ。

自分じゃない誰かの血

「……ゲホツ！ゲホツ！……ハア……」

空の目の前から聞き慣れた声が咳をしている。

恐る恐る空は前を見た。

その光景に空は言葉を失う。

そこには、

あちこちに傷を負った詩音の後ろ姿があった。

後ろ姿のためどのくらい傷が深いか分からない。だけど後ろ姿でも分かった事がある。

必死に深呼吸をし、体を落ち着かせるために肩が大きく揺れている事を。

足にさえ力が入らず足が震えている事を。

詩音の足元にある血溜まりがどんどん大きくなっている事を。

足や手にナイフが貫通している事を。

体の至る箇所に血が滲んでいた。

所々、血が滲んでいる所はナイフが刺さったと分かった。

だがもしかしたら貫通していない所もあり、後ろ姿を見て分かるような傷では無く、もっと大事に至っているのかもしれない。

「ゲホッ！」

咳をする度に血反吐がベチャツと気味悪い音をたてながら落ちる。

そして周りを見て分かった。

周りには一切ナイフが無い。

そう、全て詩音が受けたのだ。

……何で俺、こんな事してんだ？どこまで迷惑かけたよ？  
……

「詩……音……？……何で！」

「何で？じゃねえだろ。……あの言い方だと完璧、……俺が悪者だろ」

「……」

「……てめえが言った通り、俺も少し……頭、冷やした」

「え？……」

「俺も……行動が少し……すぎた。それは謝る」

「……」

「だけど一つだけ……言っとく。俺はまだ……仲野の事、許してねえから」

「じゃあ、何で？……」

「……俺、とお前の……ためだ」

「お前と、俺の……ため？」

「どうせ……お前の事だからまだ不慣れな……鎌、振る

「……頑張つてじゃねえか？……と思つてよ」

「……素直に助けに来たつて言えよ」

「……お前にどうこう、言われたくない」

「……はは」

「……今度は昼飯、全部……屋上から投げてやるから……  
覚悟、しとけ」

「それは勘弁」

「それと……」

「？」

「……俺、お前の事嫌いだから」

「えっ？」

「……だから、俺に関わるな。さっさと行け。お前とは、もう……  
喋りたくない」

「……またそうやって悪者面、するのによ？」

「……」

「もう分かってんだよ。お前がわざと俺を離してるの」

「それを、知ったから……何だよ？お前も、残るのか？」

「ああ……」

「ツ！……邪魔、なんだよ！！」

「ツ?!」

「てめえが居たって……戦力不足だ」

「……」

「そんな無能な……お前でも、やってほしい事がある」

「俺に？」

「ああ……お前は仲野連れて、外に行け」

「嫌だ」

「るっせえよ。てめえと居たって……俺は何一つ変わらない。……何一つ、お前は変えれない」

空はその言葉にショックを受けた。何も言えない。口が開かない。何を言えればいいか分からない。

その言葉はどんな悪口よりももっと心に來た言葉。

「……そっか」

「分かったら、さっさと黒奈を助けに……行け。お前なら、出来

る。信じてんぞ……空」

詩音の言葉に一度驚きの表情を見せた空だが無言で詩音に後ろ姿を見せ、入れだけ力を入れ、黒奈を背負い去った。

『ふーん、君も私と同じで一人で頑張るの?』

詩音は喉の奥から込み上げてくる血を気分が悪いが呑みながら言葉を吐く。

「……ハア……ハア、お前と一緒にすんなよ。ふざけた事言っと、殺すぞ」

ブシュッ!ブシュッ!……カランカラン……。

そしてあちこちに刺さってるナイフを引き抜く。

尖端に綺麗な鮮血がぬめりと着いたナイフが転がる。

足や手に至っては使えるのもやっただ。

穴が開いているようで気持ち悪くて仕方ない。

だが彼はそんな大事に至っている自分の傷を物ともせず喋る。

彼にとってはこんなもの痛くも無かった。

それよりも今がもつと大切だからだ。

限界を知らない彼は傷も無い、無傷な体をしている時のように普通に喋る。

「俺は邪魔だから邪魔だったんだ」

『ふーん。なら私の憧れは君だね』

「はっ?」

『君は一人で全部背負っている。それって自立したってことじゃない?』

「おいおい、勘違いな同情は止めるよ。自立?そんなものない。俺にあるのはもつと違う物だ」

『違う・・・物?』

「それに答えるのは勝ったあとだ。それじゃあ、悪者はとりあえず止めて邪魔者、するか」

## 16 嘘と悪者（後書き）

空は黒奈を助けられののか？

詩音の素直は本音？

詩音は本当は・・・？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願ひします



## 17 本音と信用（前書き）

前回までのあらすじ

絶体絶命の空。

彼に降り注ぐ無数のナイフの雨。

その雨にうたれたのは空では無く、詩音だった。

詩音はそんな体になっても空を見離そうと必死に嘘をつく。

そして一回だけ本音が出た。

「さつさと黒奈を助けに・・・行け。お前なら、出来る。信じてるぞ・・・空」

だが、その言葉は本当なのかは分からない。

でも、その言葉を信じて空は黒奈を連れて、走った。

そこにはもう、詩音と黒奈の本音しか残らない。

それでは本編どうぞ

## 17 本音と信用

「・・・殺しに行かなくていいのか？」

『例え、外に出ようとしても間に合わないから。人選ミスしたね』

「・・・人選ミス？・・・それはお前の思い違いだろ。アイツは・・・俺の最高な人選だ」

「くっ……」

もう体が限界来てる……。

足が動かない。

あともう少しなのに。

もう出口は見えてるのに！

あと数歩なのに！！

アイツが信じてくれたんだ……。

今助けなきゃ、誰が仲野を助けるんだよ？

だから、俺がやらなきゃ……。

だから……！！

動けよ……この！！

動け……。

動け。

動け！

動け！！

動け！！！！

動けッ！！！！

「うおらあ！！」

瞬間、空は強行手段に出た。

空は出口に向かって黒奈を投げたのだ。

足が動かない今、彼にはその方法しかない。

おかげで黒奈は外に出れた。

だが

「ハア……ハア……、良かった……」

バタッ

空はその場で力尽き、倒れた。

『……』

「……………」

『まさか、本当に出るとは思わなかったよ……』

「だから、言つたる？最高な人選だつて……」

『でも、倒れたのはどうすんの？見殺しにでもすんの？？』

「いやいや、そう俺を嘗めるなよ。それも予想済み」

『？……………』

「ハア……………、お前は本音になつても馬鹿なんだな」

『何……………それ？』

「俺が助けられない今、永井を助けられるのは誰がいる？」

『助けられる？……………ッ！！』

「おつ、本物より少しはマシか……………。そう、死にかけてはいたが外に出た事によつて仲野は起きる。それから仲野が永井を助けるはず」

『くっ！！……………無駄なことしないでよ！』

「無駄？……………。それは自分で考えてみるよ」

『……………考えるっ？』

「……………これだけは言つとく」

『……………』

「俺が今やってる邪魔はお前のためだ」

『本音が邪魔だって言ってるのにあんた何言ってるの?』

「……お前、自分自身で言ったのに覚えてないのかよ?……  
自立したって」

『……言ったよ』

「じゃあ、お前は仲野とは違う本音だ」

『……え?』

「なら……黙らせて、いいよな?」

『私と、その体でやんの?』

「別に、これはそこまで気にするような傷じゃねえよ」

『……じゃあ先手必勝』

瞬間

ドスッ

黒奈は詩音に向けてナイフを刺した。

はずだった……。

『……』

「……遅い」

詩音はそのナイフの刃を掴んでいた。

『なっ?!……』

そしてそのナイフを黒奈の手から奪い取り、血塗れの手で真上に投げ、柄の部分を掴んだ。

「ちゃんとナイフの使い方、学べよ」

『それが取られても……まだある!』

そう言いながら空にやったようにまた黒奈は無数のナイフを構える。

「リミッターブレイク」

詩音はそう唱えると右手で右腿からモデルガンを引き、左手でバツグの中からシヨットガンを出す。

そしてモデルガンをまず黒奈に構え

『私を撃つの?撃つてもいいけど本物の心が壊れるよ』

「バーン」

そう声だけで銃声を言い、何故か撃とうとしない。

『私を……嘗めてるの?』

「……………さあな」

瞬間、黒奈は全てのナイフを放った。

だが

ドンッ！！！！

詩音は大きな衝撃音と共にショットガンを放つ。

そして黒奈はそれを見て息をのんだ。

無数のナイフが吹き飛んだ。

そしてそのナイフは詩音には当たらずに、降り注ごうとする。

だが、その範囲内に黒奈が入った。

それに気付いた詩音は黒奈の方に走る。

「くっ！！！！！！」

間に合え……………！！

走れえ！！！！！！

ドスッ！ザシュッ！グサ！グサ！ドスッ！ドスッ！ドスッ！ドスッ！



## 17 本音と信用（後書き）

今回もまたこのオチですねww

さて、詩音は黒奈の本音を助けられたのでしょうか？

そして、詩音は何故助けた？

そして、そして、外（現実）はどうなっているのか？

それは次回！！

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしく願います

## 18 外（現実）の状況（前書き）

注意 裏黒奈とは今まで言っていた黒奈の本音です。

これからも裏 という感じに使っていくんで理解よろしくお願  
いします。

前回までのあらすじ

詩音に信用された空はそれをどうにかして叶えようと動かない足を  
動かす。

そして遂に、空は黒奈を投げ外に出す。  
だがそのまま意識を失ってしまった。

それでは本編どうぞ

18 外（現実）の状況

．．．．私．．．．  
また寝てたんだ．．．．

「．．．．」

黒奈は瞼を持ち上げ、起き上がり開いた眼で周りを見渡す。  
そこはまた学校。  
でも彼女は一つ疑問に思った事があった。

「．．．私．．．殺されたはず、なのに．．．生き．．．てる．．．  
？」

自分の体を見ても、出血してる所はなく傷さえもない。  
何が起きているのか、整理しようとしても資料が少なすぎる。  
分かるうとしても理解出来ない。  
周りを見ても詩音と空の姿が何故かない。  
急に一人になり不安が込み上げてくる。  
その瞬間

「仲．．．野．．．目、覚ましたか？」

さつき入れられた不気味なゲートからその声はした。  
パニックな頭の中、それを聞いて一つだけ黒奈は思い浮かぶ。

この声．．．．。もしかして．．．？

「永井・・・君？」

それは空の声だった。けど、声からしても弱っているのが分かる。

「ああ。頼みたい・・・事が、ある。その扉の中に、手を入れて・・・ほしい」

「えっ?・・・」

何故そんな事をするのか、黒奈は直ぐには分からなかった。しかも、空に何が起きているのかも分からない。けど、空はこの中にいる。

「わ・・・分かった!ちょっと待って・・・」

「ああ・・・」

そう空の返事を聞くと、黒奈は恐る恐るゲートの前に立つ。そこは明らかに未知の領域。だけど、そんなリスクを冒しても、この中に手を入れなければならない。

黒奈は深呼吸をすると、震える手の中に入れた。

「・・・・・・・・・・」

感覚がなくなる様ないつまでも長い空間。

いつまでも入れているとまるでその部分だけ、その空間の中に干切られそうだ。

そんな味わった事もない初めての感覚を味わっていると、また違う

感覚を黒奈は感じた。

ギュッ

「!?!」

その感覚に黒奈は我に帰った。  
誰かに手を握られたのだ。

「……………ひっぱって……………くれ……………」

握った本人から声が聞こえた。  
黒奈は一人赤くなりながら頷くとその手を思いつきり引いた。

「このお……………」

だが、なかなか重い。

「んぬぬ……………」

しかも、男子の手なんて握った事が無いのに今初めて握って緊張しているためあまり力が入らない。

「あーもおー!?!」

そして

「……………きゃっ!?!」

ようやく抜けた。

「・・・・・・・・ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・」

すると中から傷だらけの空が出てきた。

「な・・・・・・・・永井君、大丈夫？」

「ああ・・・・・・・・」

空のそんな姿を見て、あたふたするが、何もない。

「えっと・・・・・・・・あっと・・・・・・・・」

すると空が声をかけた。

「大丈夫・・・・・・・・。ここで休むだけで・・・・・・・・いいから」

「え？・・・・・・・・そ、そっか」

空はその言葉に静かに頷く。

## 18 外（現実）の状況（後書き）

今回は題名通り外（現実）の状況のみ！

さて、空が回復しない限り中には入れません。

詩音のねばりに懸けるしかない……。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしくお願いします

## 19 詩音と裏黒奈（前書き）

前回までのあらすじ

今回は前々回のあらすじです。

裏黒奈と闘う前に話す詩音。

その話には彼なりの本音を混ぜながら話す。

だが彼女はそれさえも遮り詩音に襲い掛かった。

一気にケリをつけようと空にやってのと同じ技を出そうとしたが、

詩音はそれを意図も簡単に破ってしまう。

だがそのナイフの矛先は今度は裏黒奈に向く。

それでは本編どうぞ



## 19 詩音と裏黒奈

『……………』

「大丈夫か……………」

その質問に答えるように裏黒奈は目を開いた。  
見てみると目の前に詩音が居た。

しかも……………軽く自分を抱いている？

瞬間裏黒奈の瞳が大きくなり

『離せ！！』

ドンッ！！

詩音を突き飛ばした。

「………」

尻餅をつく詩音だが、目立った新しい外傷はない。

どうやら今度はナイフを避けたらしい。

だがどうやって……………？

裏黒奈は詩音の後ろを見て、固まった。

そこには、自分が投げた無数のナイフが刺さっていたのだ。

どうやら詩音は裏黒奈を庇うようにして、避けたらしい。

だがその行動に疑問がある。

『……何で……助けたの?』

「何で?つて……お前に死なれたら仲野が悲しむだろ」

『悲しまない!!寧ろ私は本物は嫌い!!!!』

「けど、お前を生み出したのはアイツだぞ」

『!!--』

「アイツも今、お前を受け入れたくなくても分かれば受け入れてくれるはずだ」

『そんな訳……ない。私が今ここまで反論しているのが拒否されている証拠!!--』

「……じゃあ勝手にしろよ。だけど、消えるのはお前自身だぞ」

『え?……何で?私の体はあの子にあるんだよ!!--』

「それとは、違って今度はアイツの体じゃなく、ここに閉じ込める」

『……そんな事どうやって……』

「んな物簡単だ。仲野自身に違う本音を作り出してもらえばいいんだ」

『違う……本音?……』

「そう。そうするとお前は用無しだ」

『用……無し……』

「だけど、お前もアイツの本音だ。戻りたい気持ち、あるだろ？」

『……』

「……その様子だとあると思う……。んで、お前の感情は依存、いや自立か」

『そう』

「自立……。ね。確かにその曖昧さだと微妙だな」

『それは自分でも分かってる！』

「だけど、自立するのとアイツと縁を切るのとはまた違うんじゃないか？」

『え？……そう……。なの？』

「じゃあ聞くけど、アイツと縁を切って自立出来るっていう保障はあるのかよ？」

『……ない』

「だろ？」

『でも、だからと言って戻るのも嫌だ!』

「それは用無しになるのが怖いからか？」

瞬間

裏黒奈の体が悪寒を感じるようにビクッ!となった。

どうやら詩音は核心をついたらしい。

「…………それがお前自身の本音が…………」

『…………私自身?…………』

「そう。アイツの場合は一人は嫌だって理由だと、俺は思う。ただ  
どお前の場合裏切られるのが嫌だ」

『……………』

「まあ、どちらにせよ依存って言うルートには辿り着くよな。ただ  
どお前は変わろうとした。だけど、それは本当に自立しているのか  
?自立するなら人に頼らないってというのが常識だ」

『人に…………頼らない』

「だけど、それが核心というのならお前がその概念を捨てない限り  
自立なんて永遠に出来やしない。自立なんて言葉で言えば簡単だが  
実際やってみると難しいんだ」

『…………捨てる。でもそれじゃあ私の本音が消える!』

「じゃあ止めて大人しく仲野の所に帰るんだな」

『それは・・・嫌だ』

「・・・・・・・・結局、俺がどうこう言おうが仲野自身とお前が向き合  
わなくちゃいけないって事だ」

『・・・・・・・・あんな奴と話したくない・・・・・・・・』

「・・・・・・・・はいはい」

その瞬間

入り口の方から声がした。

「永井君、本当に大丈夫？」

「大丈夫だって・・・・・・・・」

「でも、あんな傷じゃそんな簡単に動けないと思っけど・・・・・・・・」

「いやいや、今動いてるって・・・・・・・・」

黒奈と空だった。

「・・・・・・・・」

詩音は空に無言で挨拶をする。  
それに気付いた空は

「おっ」

と声を出した。

それに

「え？」

と黒奈が何か、と思い前を向く。

『……………』

「あなた……………」

裏黒奈が黒奈を見る、ではなく睨み付ける。

それを見た空はとりあえず詩音の方に非難する。

「あれ、いいの？」

「大丈夫だ。てかアイツら自身と話さないとキリがない」

「……………そっか……………」

19 詩音と裏黒奈（後書き）

そして出逢う本音と本物。

彼女らは互いに何を思っているのか？

何を言うのか？

次回、黒奈が成長する……はず。

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。

これからもよろしくお願ひします

## 20 気付かなかったもう一人の自分（前書き）

もう10月突入！

つつてもこれ書いてるの深夜ですけどねww

これからも作者も粘って行きますんで、読者の皆様どうか温かい目でよろしくお願いします。

でも……出来れば評価だけでもして欲しいです……。

多分そついうのがあればもっと上手くなれると思うので本当に！お願いします……。

作者のスキルアップのためにもご協力下さい。

前回までのあらすじ

裏黒奈が放ったナイフを全て回避した詩音だったが、そのナイフの矛先は今度は裏黒奈に向けられる。

急いで裏黒奈の元へと走る詩音。

そしてぎりぎり避けたらしく二人共刺さる事はなかった。

その行動に裏黒奈は「何で助けたの？」と聞く。

その質問に詩音は「お前が死んだら仲野が悲しむ」と言う。

それに反発する裏黒奈だが、詩音がその反論さえも追い討ちをかけるように畳み込む。

だんだん裏黒奈の心理を掴むように、言葉をかけるが。

結局は本物の黒奈と話し合わないと埒があかない。



そんな時に、空が黒奈を連れて中に入ってきた。

それでは本編どーぞ

20 気付かなかったもう一人の自分

裏黒奈はいきなり黒奈に牙を剥こうとするが、詩音がいるという事でそれは無理だと思い止める。

「……………」

『…………私は、あなたの事嫌い』

ならこうする、と言わんばかりに今度は言葉で牙を剥く。

「知ってるよ…………だからあんな事したんでしょ」

あんな事とは裏黒奈に刺された時の事。

『分かってるならいい』

「それで、あなたは…………？」

『あなたの……………本音。認めたくないけどね』

「私の……………本音？」

『そう。まああなたと違って自立したいけどね。だからいつまでもウジウジしてるあなたが嫌い。だからあの時刺した』

「……………私、人に頼らなきゃ……………怖い」

『それは頼るじゃなくて依存じゃない?』

「依存……」

そう黒奈は自分に言い聞かせるように呟くと詩音の方を少し見る。

『あんた今、そんな人間だったら将来どうするの?』

「……」

『そんな事して嫌われないとも思ってたの?』

「……そ……それは」

『まあ、現時点で嫌われてるんだからもう理解はしてるよね?』

「……」

『……じゃあ私みたいになりなよ。そっちの方が楽だよ!』

「楽、だけど今の私は……あなたみたいにはなりたくない!」

『……せつかく私が今落ち着いてこう言ってあげてんに断るの?』

「うん。私には私がある」

『依存……してるのに?人に頼らないと生きていけないあんたの……!』

裏黒奈の言葉がどんどん過激になっていく。

「それでも！……それでも、自立する方が自分が消えちゃう。人に頼らなくて一人って……とても寂しい事のはず」

『寂しくなんかない！私は私。私は自立し』

その言葉の途中、黒奈が口を挟んだ。

「……でも、今は言いすぎた。ごめん。もう、分かっている私はあなた。私は……裏切られるのが怖い。あなたは？」

『私は捨てられのが怖い……』

「じゃあ同じ」

『……あなたに』

その瞬間言ってしまったのか、言いたくて言っているのか分からないが本音が出た。

「え……？私……に？」

『……。別に！相変わらず私はあなたの事が嫌いだけど、あなたの事が分かった。……あと弱虫って私も同じなんだ……』

「……だから二人で頑張ろ」

『……』

裏黒奈は無言だったが頷いた。  
そして、黒奈の元へ戻る。

## 20 気付かなかったもう一人の自分（後書き）

今回は結構シユールというか、淡々としていました。  
すみません……。

まだ次回も黒奈パート続きます！！

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。

## 21 決意の強さ（前書き）

お久しぶりです。

更新遅くなつてすみません。。。。

部活の大会の方が忙しくww

そろそろテストも近いので、また間が開くと思うのでよろしくお願  
いします。

前回までのあらすじ

裏黒奈と黒奈。

同じだが異なりが起きたのでこうなった。

でも何で？・・・。

黒奈はただそれだけだった。

でも自分がそう思ってるのはホント。

裏黒奈が苦しんでるのも同じ。

黒奈と状況は違えど、同じ。

同じ、黒奈なんだから。

だから、頑張ろう。

二人で。

こうして裏黒奈は黒奈になった。

それでは本編どうぞ

## 21 決意の強さ

「・・・・・・・・・・」

しばらく訪れる沈黙。

だが、その沈黙もある音で破れた。

・・・・・・・・バタツ

「詩音?!」

空が叫んだ。

まだ傷が一つも治っていない詩音がその場で倒れたのだ。

ホントは死んでもいいほどの傷なのによく今まで立っていられた。

「・・・・・・・・空元気、使いすぎた……。てか体が無茶し過ぎた」

「何やってんだよ! キツイなら、先に言えよ・・・・・・・・」

空はそう言いながら詩音の腕を自分の首の後ろに通し、肩を組む。

「・・・・・・・・ちょっと待ってる……。直ぐ助けるから・・・」

「・・・・・・・・」

そこで黒奈が動かなかった。

裏黒奈がいなくなってから一步も動いていない。



それを見た空が

「仲野………?」

と声をかけると、黒奈は空の方へ急いで振り向く。

「ううん。何でもない」

「………大丈夫か?」

「この通り大丈夫!!」

黒奈は元気にピースを見せる。

だが空は黒奈の姿を見て思う。

こちらにも空元気が……。

すると空のその様子を見た黒奈は誤魔化すように空達の方へ行く。  
そして

「わ、私も手伝うよ!」

と空と同じく詩音の肩を持つ。

途中、黒奈はやはり疲れていて、止まってしまう事があったがピースを遅くして、歩いていった。

そのまま三人で出口へ向かった。

ドサッ

「ハア……ハア……」

空が振り向いてみると黒奈は息絶え絶えになっていた。

自分の事だけでも精一杯なはずなのにここまで手伝ってくれる。

空は一度自分にも降りかかった事を思い出しながら感心した。

そんな黒奈に空は声をかけてみる。

「大丈夫か……?」

「大丈夫……夫」

あの空間に入り、体のバランスが取れてないのか膝に全体重を乗っけるような体制で黒奈は言う。

「本当に?」

「大丈夫……だってば!」

その姿勢では髪に隠れ、表情が見えない。

急に口調を強めた黒奈に少し驚いた空だったが、直ぐにそれを止め、きちんと黒奈の方を向き今度は言葉をかける。

「……なにかあつたら言えよ?」

今の空の言葉は彼女にとっては救いになるはず。

空は少しでも彼女の助けになりたかった。まだまだ未熟だが、同じ

気持ちを持つているはずの黒奈を励ましてやりたかった。  
だが彼女の表情は微動だにせず、相変わらず表情が見えない。  
すると表情は見えないが、垂れている前髪の間隙から微かに動く唇  
を空は見た。

「……もう少しだけ、時間がほしいの。もう、ワケわかんない」  
ようやく動いた唇からは疲れたようなため息と共に言葉が出る。  
逆に混乱しないほうがおかしい。  
空はその言葉に直ぐに納得した。

「……分かった。まあ、そうだよな。無理はするなよ」

コクンと静かに頷く黒奈。

そのまま彼女は下の階へと降りていった。

一人居なくなり、静まり返る廊下。

空がふと、視線を溢すとそこには

「……」

さっきまで自分達のために傷だらけになり、必死に闘った少年、詩  
音が寝ている。

だが、詩音に声をかける空。

「なあ、詩音」

「……」

詩音はやはり無言。

空とは反対に顔を向けていて顔が見えず、本当に寝ているか分からない。

「お前さ、仲野の事助けて後悔してないの？あんなに嫌がってたのによくやったよな」

「……………」

「でもそれにはやっぱりちゃんとした理由があんだろ？仲野のこれから見守るとか？それとか自分が正義とか？」

すると

「……………ハア」

詩音はため息をつけるや否や「よいしょ」とかけ声と共に急に勢い良く起きた。

どつやら既に意識はあつたみたいだ。

詩音を見ているとまるでさっきまでの傷が嘘のような体の動きをする。

「誰があんなやつ的事見守るかよ。それよりも」

詩音は一旦言葉を止めると空を真っ直ぐな視線で見つめた。

「何であそこまで憎まれ口を叩かれたのに来た？」

「何でって……………。他に誰がお前を助けるんだよ？」

その率直な答えに顎に手を当てながら考える詩音。頭を使っている

ようで、人間のよくある癖。少しだけ視線が斜め上に行っていた。最初に「ふむ……」とだけ呟くと言葉を続けた。

「……確かに」

だが結局そう答えることしか出来ない。

でもそんな理由で？という疑問が詩音の中に浮かんだ。というか普通に思う。

「けど俺が聞いているのはそういう答えじゃない。あの空間内云々じゃない、お前自身の答えだ」

「……やっぱりお前が仲間だからさ」

「……俺がもしその事を理解していないと言ったら？」

「えっ……？」

「だとしたらお前はどつすんだよ？」

「……どつす……どうするって言われても……」

詩音の顔をまともに見れずに俯く。

顔を、表情を見るのが怖かった。

緊張、プレッシャー、絶望させてしまう恐怖。

空はそれ以上の答えは考えていなかった。

空はそれ以上の理由はない。

無い答えを必死に探す空。

だが無いものはあるわけがない。

空には詩音のその質問が恐怖に思えた。

もしかしたらこの質問に答えなきゃ詩音が行ってしまつかもしれない。

詩音は空の答えが聞きたかった。

コイツは俺についていきたくないのか？

「……………」

何も答えられない空はふと詩音の方へ顔を上げる。

「……………し……………おん……………」

瞬間、それを見た空は顔を上げたことを後悔する。

それとは詩音の表情だった。

その表情はいつもと違い、期待を裏切られた表情。

興味がなくなった。

詩音の表情からしてそう読み取れた。

溜息を少しつける口、力が抜けている全身。

そして睨んでいるような細い目。

その目から来る視線が自分に向けられている。

空の全身の毛穴という毛穴から汗が噴出す。

何故そんな事が起きたのかは彼自身にも分からない。だが一つだけ分かった事があった。

自分は焦っている、と。

言おうとしても答えが出ない。

何か言おうとしても、口が微かに動くだけ。

視線を浴びた瞬間、完璧に唇さえも動かなくなる。

そんな空を見た詩音が先に口を開く。

「お前のその仲間っていう決意ってそんなもんかよ？」

その言葉は答えを見つけられない空の心に深く突き刺さった。

「……呆れた」

詩音はその一言を空に残し、階段降りて行った。

そして空はそこに一人、立ち尽くしていた。

## 21 決意の強さ（後書き）

仲間の決意ってそんなに強いもの？

仲間って深めていくもんだよ。

詩音はまだそれが分からない。仲間がいないから。

これから詩音がどのように成長していくのか？

さて空はどうするのか？

感想、意見、アドバイスなどをくれると凄く嬉しいです。  
これからもよろしく願います。



## 22 仲間（前書き）

お久しぶりです・・・。

もう10月に入ります！

それで・・・、やっていいのか分かりませんが・・・。

今回から前回までのあらすじを無くしたいと思います。

あと書き方も変えます。

よろしく願います。

## 22 仲間

翌日

朝のHR中、詩音は机に肘をつきながら面倒くさそうに手に顔を置き、首をぐるりと回しながら周りを見た。

黒奈の席は本人がいなく、ぽっかりそこだけ穴が出来ていた。空の方を見てみると、いつも元気なくせに今日は上半身を突っ伏していた。

その空の姿を見た詩音は一人、深いため息をつく。

とりあえず1時限目が終わり、空に近付く。

空の目の前へ行き軽く声をかける。

「おい……」

「……」

だが空は無反応。

直ぐに諦めた詩音は自分の席へと戻った。

昼食時間

二時限目から今まで空の所へ行かなかったが、少し見るくらいはしていた。

授業は相変わらずちゃんと受けている。

だが授業が終わった途端、ロボットが作業をするように頭の中で直ぐ様何かのスイッチを切り替え、あの状態になる。

もう一回近付いてみる。

そしてもう一回声をかける。

「おい」

「……」

だがまたもや無反応。寝てるんじゃないか？と思うほどの無反応っぷりだ。

そして詩音もまた自分の席へと戻った。

放課後

詩音はHRが終わった瞬間空を見た。

「……」

たまたま目があった空は驚くほどの反射神経で一人、机に突っ伏す。周りは勿論空を不思議そうに見ていた。

これはこれで目立つが動かないなら好都合だ。

瞬間、詩音は空に近付き二回目の正直と言うが、勿論無理だと思った詩音は

「ついてこい」

連れ出そうと決めた。

「……誰が行くかよ」

ようやく反応があったと思ったら、断られた。しかも睨まれる詩音。

それにはもう懲りた詩音は空の睨みには目もくれず、ガシッと空の腕を掴んだ。

「ちよっ……何すんだよ！」

空の反抗にも耳を貸さずにズンズンと腕を掴みながら何処かへ向かう。

ガチャとドアを開ける。  
瞬間、今まで人工的な明かりの中とは変わり自然な明かり、太陽光が体に降り注いだ。  
そこが何処だが確認しようとする。  
だがよくよく考えてみたら結構会談が上がってきたんだ。  
要は一番上。  
だとしたら答えは一つ。  
屋上だ。

「何でこんなところに？」と詩音に聞こうとした空だったがその質問は腰辺りの衝撃によって途切られた。

「って……」  
詩音が空の腕を投げるように離れたのだ。

「お前の答えを聞かせる」  
空を見下すようにして立っている詩音は昨日と同じ台詞をまた吐いた。

空は「またその言葉？」と思うとそれが表情に出て、いかにも怪訝そうな顔をする。

「……俺に呆れたんじゃないのかよ？」  
まるでいじけるようにして顔を伏せながら言葉を言う空。

「……確かに俺は昨日そう言った。だけどあれは俺が勝手に口を出した。だからお前の答えはちゃんと聞いてない」  
その言葉に空は苛立ちを覚える。

何でそんな事言うんだよ。俺にそんなの期待すんなよ。呆れてんだろ！！

「……そんなの昨日ので分かったろ？」

「……じゃあ、あれがお前の答えでいいんだな？答えられない、

で

「だから、そう言ってるんだろ……」  
「そうか」

詩音の表情は微動だにしない。

相変わらず何を考えているのか分からない。

次にどんな行動をするかさえも予想がつかない。

瞬間、詩音がやはり驚くべき行動に出る。

## 22 仲間（後書き）

空の答えは本当にそれでいいのか？

違うだろ？・・・。

本当の事言えよ。

俺が求めている答えはもっと違うんだよ・・・。

次回空と詩音のぶつかり合い

これは作者の事なのですが・・・。

えっと・・・今までS・Gの方とちよいちよい短編を投稿していたのですが、新しい長編を新連載したいと思います！  
勿論とこつちと同時作業です。

これからも遅くなると思いますが、お願いします。  
ちなみに新しく書く方は「コメディ」です。

これからもよろしくお願いします。

### 23 本物の友達

それは瞬間的な速さだった。

空は驚く暇もなく、詩音に壁に追い込まれる。

いきなり肩を掴まれたと思ったら、壁に押し付けられる。

「何・・・すんだよ・・・」

だが空に対して返答をいっさいせず、空いてる右手で太腿のモデルガンを抜き、空の額にゴリツと硬い音がするほど押し付けた。

「実力行使だ」

その声は伊達じゃないほど、ドスがかかった声。それだけで緊張感を出している。

「・・・何が聞きたいんだよ」

それに少し怯んだ空だったが、恐れる気持ちを奮い立たせ、問う。

「お前本当に俺を仲間だと思ってんのか？思ってたんなら、あそこで言葉が出たはず。なのにな何でだ？」

「知るか。出ない物は出なかったんだよ」

「出なかったって事は、お前は思ってたないって事だ」

「何の根拠があつてそんな事を言えるんだよ？」

「簡単だろ。気持ちと信頼だ」

「・・・気持ちと・・・信頼・・・？」

「気持ちがあつたら、納得させるまで抗議をひたすらするはずだ。

信頼があれば、相手の気持ちを裏切らないはず。今のお前はどうか？」

「・・・」

両方とも当てはまっていた空は口が出せなかった。

「今のお前は正にそうだろ？お前は多くの物を失っている。もう一度取り戻したとは思わないか？」

「・・・だけど俺にはもう無理だ・・・」

「無理じゃなくてやってみるのが大切なんじゃないのか？」

瞬間、空は急に俯きだし、詩音の肩を抜い

「……あかは……」

詩音の腹に膝蹴りを入れる。

詩音の反応も見ずに空はそのまま、詩音の後ろへ行き距離を取る。

「いいよな……どうせお前は他人事だもんな。それを言えば、分かってくれるよな。ホント！いいよな！！！」

空は俯きながら、詩音に叫ぶように訴える。

「そうだよ！確かに俺はあの時答えられなかった。俺はそこまでの事なんて考えてなかった。ただお前と仲間をやってるだけで良かった。なのに……なのにさあ、普通あんな事聞くなよ。俺、どうすればいいか分からなくなるだろ……。じゃあお前だったらあの時どう答えていたんだよ」

腹の痛みが治まった詩音は立ち上がり、空の質問に素直に答える。

「仲間ではない、と言っていた」

瞬間、空は呼吸を止める。そうすれば聴覚も聞こえるはず。あれが幻覚と思えるはず。だけど、無理だった。詩音の口からそんな答えは聞きたくなかった。

「……お前にとって俺も！仲野も！！所詮その程度なのかよ……」

台詞の最後に至っては苦痛の叫びみたいに、声を絞り出す。

これが認めたくない事実だから。

「ああ」

それに何事もないような返事をする詩音。

「じゃあどうすればいいんだよ……。俺は、俺たちはどうしろって言っただよ！！」

「そんなの自分で考える」

「……えよ」

「え？」



「ふざけてんじゃねえよ!!」

「!!」

「自分で考える?確かにこれは俺たちが変わらなくちゃいけないから俺たちで考えなくちゃいけない」

。だけど、それは誰に対してだ?お前に対してだろ!なのに、お前はいつもそうだ!!そうやっていつも隠して、俺たちに何も見せないで、自分に関係がないと思っただら放り捨てる。じゃあ俺はお前にとって、その関係ないものなのかよ?俺たちはお前のために何も出ないのかよ!俺たちは・・・俺は、お前の友達にすらなれないのかよ?認めてくれないのかよお!!」

「・・・・・・・・・・」

それを無言で聞く詩音。その表情は何も浮かばない。彼は一体空に対してどう考えているのだろうか?

「俺だって昨日考えた。だけど答えの前に気付かなかった!俺たちって本当に友達なのか?って事を。俺の自意識過剰でお前はそうは思っていないかって分からなかったんだ。だけど、もしお前がそう答えたら、俺はまた前に戻る。まだ未熟だから。だから俺はまた!」

「・・・・・・・・・・」

「だから・・・だから!!俺はお前がいなくちゃダメなんだよ!依存症じゃない。家来でもない。友達として一緒にいたい!!!・・・ダメなのかよ。そんな細かい事で崩れるような関係じゃ、俺らダメなのかよ!これからそれを作るっていうのはダメなのかよお!!」

「!!」

「・・・・・・・・それってアリだったのか?」

瞬間、場の空気が一転した。

空も前を向いてしまうほどの空気の変わりよう。

「え?」

今まで必死だった空も素っ頓狂な声を発する。

「え?」

詩音も今までに見せたことが無いほど驚いた顔をした。

「え？・・・あー・・・それもアリだと・・・思う」

頭を掻きながらボソボソと呟く。

「じゃあ・・・それでいつか」

詩音は一人頷く。

「・・・えーっと・・・じゃあそういう事で・・・これは」

「一件落着」

そこで沈黙が訪れる。

「・・・」

「・・・」

その沈黙を破ったのは「はあ・・・」という空の今まで溜めていたため息だった。

「・・・ごめん。今日の方が結構頭ぐちゃぐちゃになる・・・。

俺・・・帰るわ」

「ああ」

そういつと空は屋上から消えた。

空が消えたあとの詩音はというと、フェンスに寄りかかり最終時刻ギリギリまで空を見ていた。

### 23 本物の友達（後書き）

結局は・・・そんな簡単な事だったのかよ・・・。  
何か損した気分・・・。

次回黒奈登場！！

これからもよろしくお願いします

あと、明日の土曜の更新から毎週土曜更新にします！

それと新しく連載するやつは、明後日の日曜から毎週日曜更新にします。

けど、余裕があったらどんどんしたいきます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4258w/>

---

S・G（センチメント・ゲート）

2011年10月29日01時09分発行